

289-01227



1200500732262

289
22



始





289
0.122



小畑源之助君傳





日本帝國展章之記

森廣編 岩谷實校

小知源之助

凡一處者，堪與之者，致之稱禮物，發展蓋力。

所始，日本之製造機械式會社，入

苦心經營幾多，雖國之盛，益之往者，擴張之智，克

之今日，盛運，見之至，至之詢，專業特助，救民

，機紀，者，大依，明治十四年十二月七日

物定，錄，展章，則，其善行，表步，。

昭和四年二月十八日



賞勳局總裁四位勳等天國直嘉



此證，勳章，第五百七十六號，

以予，勳章簿冊，登記，

賞勳局書記從五位伊手衛



臨台社會トソイベ本日下殿宮父秩

(掲載許可済)

臺灣省立第一中學學生會聯合會

(附錄 附錄 附錄)

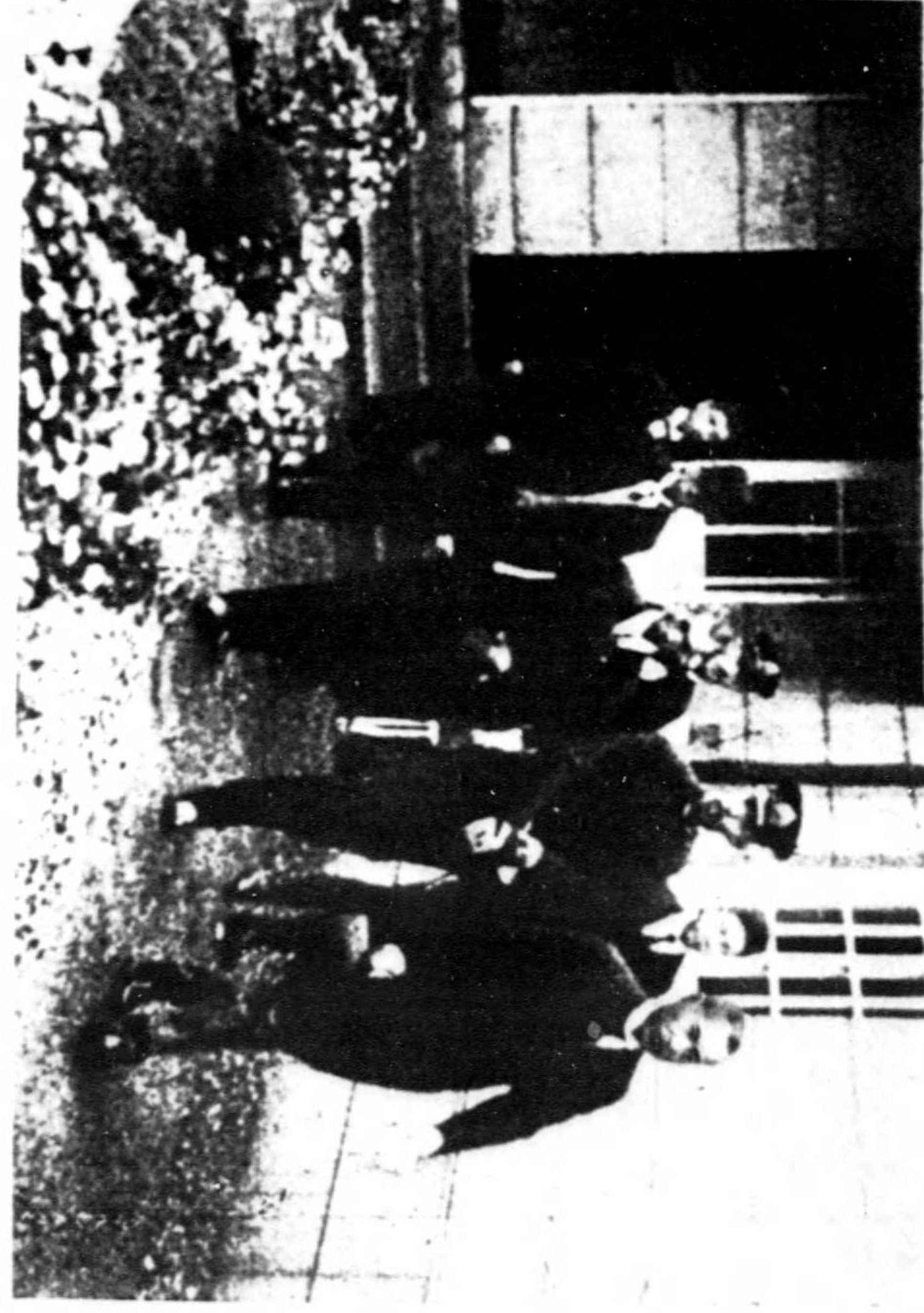


伏見宮殿下日本人名會社台臨

(濟可許御載攝)

(續前頁)

總理官邸內日本公使與總理官會談

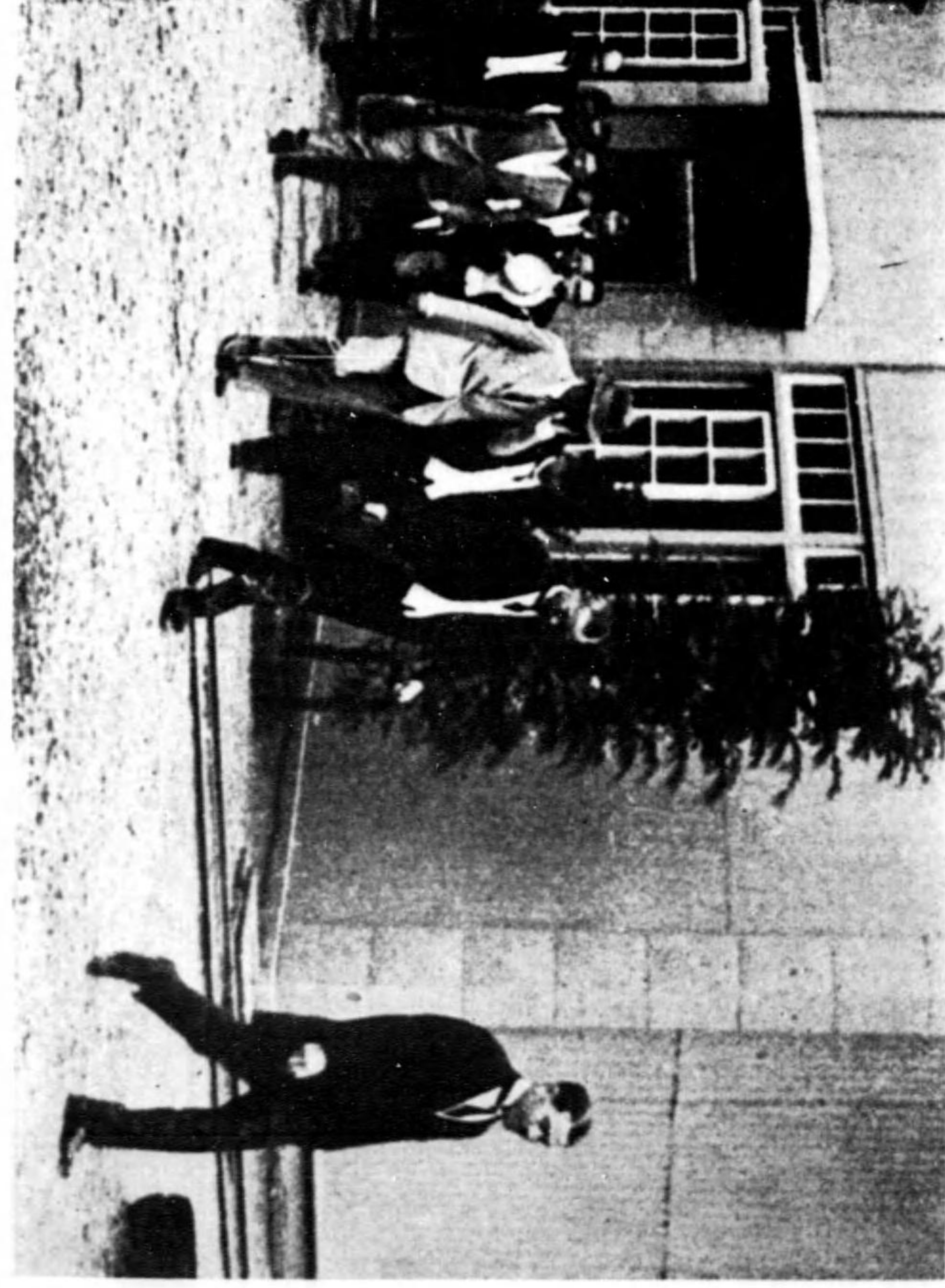


東久通宮殿下日本ソノイニソノイニソノイニ
臨台社會トソノイニソノイニソノイニ

(掲載御許可済)

東亞郵政通商銀行總行在東京

(東京總行)



臨台社會トソノイベ本日下殿宮香朝

(攝收御許可濟)



國省百樂會演習 演習者合影

(國省百樂會演習)

序

小畑源之助君は山陰但馬の産、弱冠にして但馬織物會社を起し其專務取締役に任じ、後京都に出で倉庫・銀行・保險等各種の事業に關與し、大正元年日本ペイント株式會社の聘に應じて大阪に移りてより、一人一業を堅守して同社を主宰し、我國化學工業の進展に貢献するの外、國家的企業經營の範を示し、傍ら公共の事に盡瘁し、全國産業團體聯合會・日本工業協會・大阪商工協會・大阪實業教育協會・大日本産業報國會等の組織を企て、或は之が會長・副會長又は理事長の任に膺り、其他中小産業並に社會・労働の諸問題に造詣深く、夙に我國財界一方の重鎮として知らるるに至れり。

昭和四年二月朝廷君の功を褒して綠綬褒章を賜ひ、同七年十

一月長くも御陪食の恩命を拜し、同十五年九月更に紺綬褒章を賜ひ、又屢々宮中御會に召され、拜謁賜品等の光榮に浴す。

君また多年内閣及各省委員會の委員に列し、現に厚生省參與として勅任官の待遇を辱ふす。

近者老來益々健康を加へ、戦時下國家の重要問題に參畫して匡翼の力を致し、寸隙なき日常を送りつゝあり。

君が識徳いよいよ高明に、國家に重きをなすの日は寧ろ今後にあるべきも、本傳は昭和十六年を以て一應筆を擱き、光華を後日に收むることゝなせり。

昭和十七年二月

編 者 識

本書編纂に就いて

但山小畑先生、少壯志を立て身を實業界に投せられてより四十餘年、其經營企畫行くとして可ならざるなく、就中日本ペイント會社の再建に力を致し、本邦塗料工業をして世界的大産業たらしめたるの功績は、朝野の齊しく認むる所なり。

昭和六年滿洲事變勃發以來國家多端なるに及び、先生は挺身官民の間に立ち、多年の蘊蓄と天稟の卓見とを以て大いに國策に寄與し、當代樞要の偉材として世の敬仰する處となれり。

偶々昭和十年十二月先生の還曆に當り、我等多年その高風を欽仰し提撕薰陶を忝うせし者相議り、先生の傳記を編纂して後人に貽さんことを企て、其承諾を求めたるに、先生は生前世に公にせざるを條件として之を肯んぜられたり、爾來執筆者を物

色し、十四年六月漸く能文の士高梨光司氏に囑し、前後三ヶ年にして之が完成を見るに至る、則ち前約によりて今之を公にせざるも、非常時下稿本の散逸せんことを恐れ、且つ先づ剞劂に附し装幀を略して先生に献ずることとしたり。

若し夫れ本書に因りて、先生を知ると共に明治大正昭和に互る變轉極りなき時代の一面を知るを得、併せて後進子弟の爲に立志發奮の資ともならば我等の本懐之に過ぎざるなり。

但山會同人識

本書見返しの畫は但馬出石鶴山の圖

小畑源之助君傳 目次

第一章 少青年時代 一

君とその郷里 一

邀 月 莊 三

お稻荷さんと宮の宮 六

修 學 一〇

早熟の少年 一三

青年會を發起 一七

初めて京都に出づ 一九

京阪播洲を歴遊 二三

少年園・文庫に投書 二五

目次

一

投書家時代の君	二九
織物業視察	三〇
織布工場創立	三〇
但馬織物會社	三三
君と但馬雜誌	三三
北海道旅行	三三
織物會社解散	三三
二府九縣に出張	三五
當年の君の意氣	三五
第二章 京都在住時代	三六
大雪の中を京都へ	三六
新井氏と君	三六
藤井氏へ紹介	三六

織物倉庫に關係	三六
好箇のアシスタント	三六
江洲系巨商と接近	三七
第三章 日本ペイントに入社	三九
入社 の 經 緯	三九
藤井氏の諒解	三九
過去の塗料工業	三九
光明社と光明合資會社	三九
日本ペイントの創立	三九
營業方針の轉換期	三九
入社當時の生活	三九
日本ペイントの發展	三九
第四章 日本ペイントの改革	三九

會社經營の行詰り	九五
改革の衝に當る	九七
社内諸制度の革新	一〇一
着々効果を奏す	一〇四
事業經營の要訣	一一〇
第五章 更生後の會社と君	一一三
青年修養會の設立	一一三
日本ペイント社長に就任	一一四
皇太子殿下侍從御差遣	一一五
創立三十年記念會	一二九
會社關係者追悼會	一四〇
塗料知識の普及宣傳	一四一
大黒會と恵比須會	一四三

壽像の建立	一四八
伏見宮殿下東京工場台臨	一四九
綠綬褒章下賜	一五二
聖上に拜謁	一五五
侍從御差遣の光榮	一五七
流石！日本ペイント	一六四

第六章 最近の日本ペイント 一六九

日本ペイントの大陸進出	一六九
社内設備の充實	一七三
度重なる光榮	一七五
日本ペイント産業報國會	一七六
創立四十年 附、光明社創業六十年	一八〇
社員指針と東西工場歌	一九〇

第七章 労働組合法案と君 一六

 當年労働運動の悪化 一六

 所謂社会局案の發表 二〇

 組合法案反對の陳情 二〇

 内相官邸懇談會 二〇

 組合法案の最後 二六

 團琢磨男に傾倒 三〇

 君と國際労働會議 三三

第八章 全産聯並に關西産聯と君 三五

 最初は實業懇談會 三五

 近畿産業團體聯合會 三三

 全産聯の結成 三五

 全産聯總會に於ける君の挨拶 三九

第九章 公人としての活動 四一

 君の本領と幾多の公共問題 四一

 國産振興運動と化學工業博覽會 四六

 資本家の教育 五三

 中小工業問題 五七

 大阪工業會 六三

 大阪商工會議所 六七

 職業紹介事業 七〇

 大阪商工協會 七七

 工業教育振興會 八〇

 日本工業協會 八三

 殉職警察官救慰會 八六

 名家秘藏品展覽會 九一

軍需工業研究会	二九五
大阪商工祭	二九八
大阪實業教育協會	三〇三
工場災害對策研究会	三一二
大阪府警察病院	三一五
國立工藝指導所の大阪誘致	三二二
軍官民懇談會	三三五
斯經禪師の百五十年大遠緯	三七七
産業報國會	三三〇
輸出原料配給會社	三三六
大阪高工設置問題	三三九
大阪興亞會	三四三
皇道産業會	三四八
ロータリークラブ	三五〇

第十章 滿洲事變と君

滿洲建國と大官の往來
對滿時局對策に没頭
日本團體生命保險會社の創立
關西大風水害と災害科學研究所
中小工業助成と平和産業維持の問題

所謂非常時相の出現
滿洲大博覽會及各種貿易展覽會の開催
産業行政機構の改善問題
非常時下の社會立法批判

第十一章 支那事變及大東亞戰爭と君

經濟團體の聯盟結成
輸出振興と副原料問題
大日本産業報國會の誕生
配給機構と消費制限の問題
信用動員の強調
米の不足と食糧問題
大政翼賛會の發足
經濟新體制の確立

國民精神總動員運動の出發
電力問題・石炭問題
内閣中小産業調査會
物價對策審議會と形成委員會
大阪國際飛行場の建設
念進新官僚の理念政治(所謂新體制問題の擡頭)
紀元二千六百年記念祝典
中小企業の整理と轉廢業者對策

大阪皇道講座の開設……………
 中央協力會議と行政監察制度創建の提唱……………
 英米の資金凍結と貿易政策の大轉換……………
 勤勞管理の問題……………
 大東亞戰爭と一億一心の結集……………
 統制政治の飛躍……………
 産業設備營團……………

第十二章 君の光榮…………… 四七〇

光榮の數々…………… 四七〇
 御陪食の光榮…………… 四七五

第十三章 家庭と環境…………… 四八〇

君の家庭と近親…………… 四八〇
 住居…………… 四八六
 嗜好と健康…………… 四八七
 一人一業主義…………… 四九〇
 但山會と藏心會…………… 四九二

小畑家の菩提寺と瑩域…………… 四九七

第十四章 郷土の先覺と師友…………… 五〇〇

郷土の先覺者…………… 五〇〇
 同國出身禪林の三者宿…………… 五〇一
 少年時代の師矢野義旋和尚…………… 五〇九
 郷友…………… 五一一

第十五章 君の風流雅懷…………… 五一五

書畫と國風…………… 五一五
 詩と俳句…………… 五二六
 君の現任公職…………… 五四八
 年譜…………… 一

小畑源之助君傳

第一章 少青年時代

君とその郷里

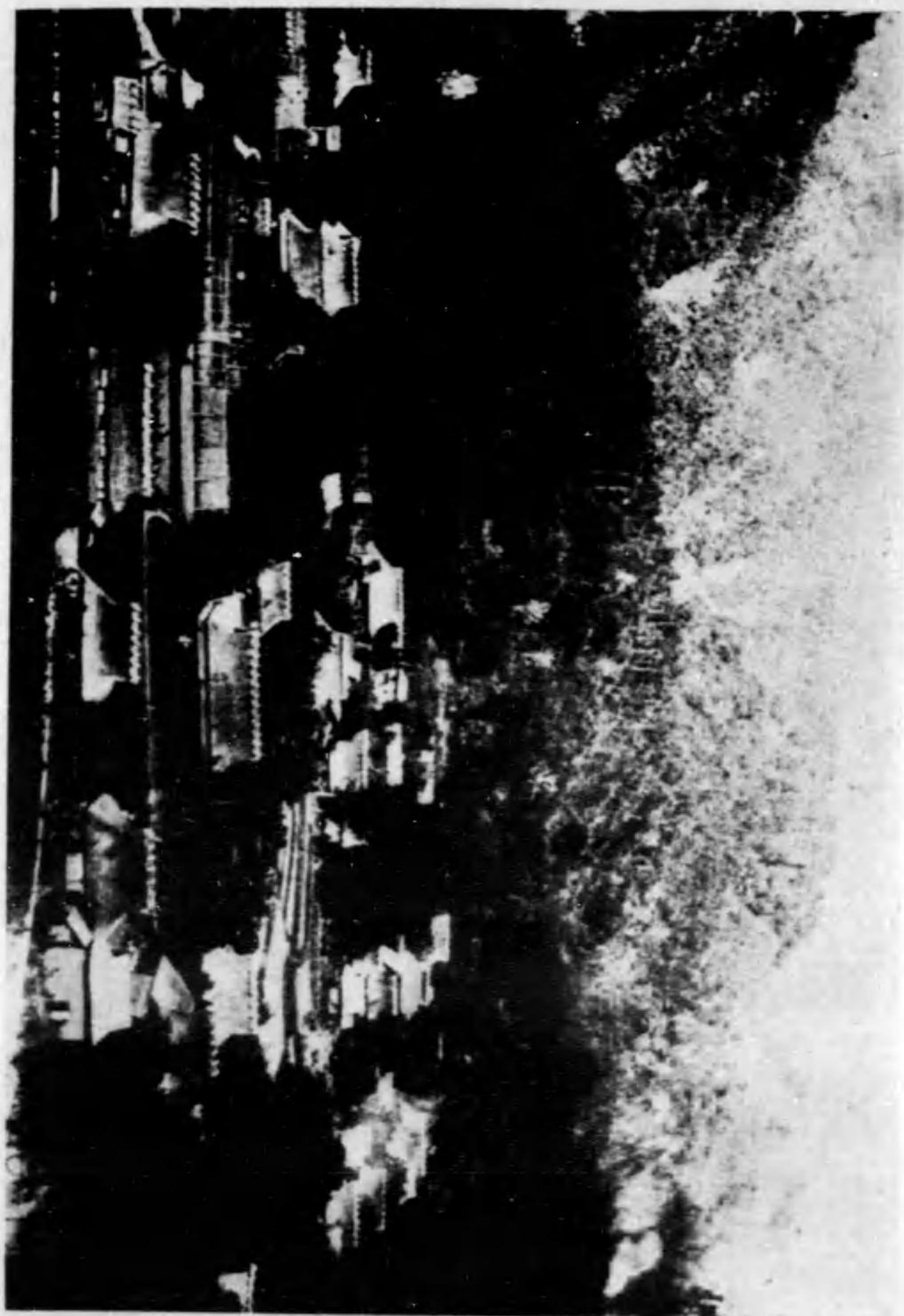
小畑源之助君は、明治八年十二月二十二日、兵庫縣但馬國出石郡口藤ヶ森村（現在資母村口藤）三十七番屋敷に於て呱呱の聲を擧げた。父は作右衛門母はゑい、君はその長男であつた。

由來但馬國はその地勢の上から見て、山間・平野・海邊に大別すること出来るが、出石郡はその半ばが俗に「山の内」と稱せられる山間で、特

に口藤ヶ森の屬する現在の資母村は、同郡の東端に位し、境を丹後に接し、四面山に圍まれ、東方には金藏山・江笠山、南方には東里ヶ嶽、西方には高龍寺山などがあり、その間を東西に縫ふ太田川の流域に沿うて僅かに平地があるだけであるが、口藤ヶ森に至つては、資母村北部の山峽で、戸數僅かに五十の一小村落である。随つて、村人は農を以て主業とし、日夜耕耘の外には、副業の養蠶と機業に携はるのみで、他は何事にも觸れない純朴の民である。

君の生家は代々作右衛門と稱し、數百年以前から村に土着した舊家であつた。

徳川時代には階級制度が極めて嚴重で、百姓の身分で士分と婚儀を通ずるが如きは思ひも寄らぬことであつたが、君の嚴父作右衛門翁は、出石藩士富岡氏の出で立派な士分の娘を娶ひ刀自を迎へて配とした。この一事を以て見ても小畑家が界限切つての由緒正しい家柄であつたことが分る。



景全村森ヶ藤口里郷

邀 月 莊

小畑家は其の邸を繞つて、茂林あり、脩竹あり、環堵肅然一廓を爲して
るたが、母屋の外に別に一棟があつて、東南を開いて風雅に建てられ、月
を邀ふるに佳なるがために邀月莊と稱へてゐた。この邀月莊には文人墨客
の往來する者多く、中野恭堂・酒井東里・大圓寺來々山人などの詩賦が今
なほ傳はつてゐる。

中 野 恭 堂

月 月 觀 月 三 五 月	就 中 最 好 中 秋 月
宇 宙 別 有 富 貴 月	春 宵 一 刻 千 金 月
古 來 人 生 好 觀 月	今 時 月 同 古 時 月
赤 壁 山 下 詞 客 月	潯 陽 江 頭 思 婦 月
思 婦 詞 客 各 見 月	或 樂 或 怨 同 是 月

少 青 年 時 代

老夫生來甚愛月
說與少年莫輕月

觀來九百餘回月
春夢未覺忽秋月

酒井東里

四海何地無明月
但山樵夫最愛月
人間何義取干月
賞花賞雪又賞月
別有深意在干月
夢世思君須磨月
才媛搦管對湖月
西土亦有黃洲月
蘇子仙才叙風月
諷詠聲清袁舫月

世間誰人不愛月
自築山莊名邀月
笑而不答仰看月
人生樂事豈獨月
請代主人試解月
惜別吹笙足柄月
名將橫槩賦霜月
千載堪思扁舟月
二賦光彩明於月
酣醉興長度樓月

古人寄情多在月
元是千古同一月
古人今人齊看月
一夜山莊深更月
主人讀書時望月
噫我倥偬送歲月
霜夜驅犢逐殘月
生來有癖憐風月
賴有故人莊邀月
秋宵閑話同坐月
此意誰知唯有月
君不見達人胸中別有月
嗟呼胸中風月天上月

今人懷古亦倚月
何論今月與古月
神交為媒是此月
四隣寂寂誰賞月
古人溫容恍現月
營營一年十二月
烟隴荷鍾踏初月
每逢佳期恐負月
屢開吟筵共賞月
春夜試茗手汲月
笑賦一詩欲謝月
匹似光風與霽月
兩兩相望月照月

來々山人

邀月莊前山吐月

長天縱目謝公情

南樓牛渚多豪興

斟酒歡茶詩又成

此淡生涯花與月

豈遜赤壁洞天月

他時應擊流霞去

吟嘯含杯且賞月

この内中野恭堂は名弘、初め一郎と稱し、夙に郷儒井上靜軒に就いて文を學び、後京阪地方に遊び諸大家に出入して醫學並に儒學を受け、傍ら田中河内介に就いて劍を修め、學成り郷里に歸り醫を業とした。恭堂は性恬淡にして世事に拘泥せず、閒餘詩賦を樂しみ、或は帷を垂れて徒に授け、清閑なる生涯を送つた。

お稻荷さんご宮の宮

口藤ヶ森の北邊字山姥には比遲神社（俗稱お稻荷さん）があり、隣村蟲生字宮には安牟加神社（俗稱宮の宮）がある。共に延喜式内に屬する古社

で、比遲神社は多遲摩比泥命・天津兒屋根神の二柱を、安牟加神社は天穗日命を祭神とする。

作右衛門翁は温厚篤實の長者で、村のことは何事にまれ世話をやき親切に面倒を見たので、村人の尊敬を一身に集めてゐた。殊に翁は敬神の念深く、月の朔日十五日には缺かさず神酒を携へて氏神であるこの兩社に參拜した。

毎年陰曆八月二十三日は比遲神社の祭禮で、村人は野良仕事を休んで寛ろぎ、田舎らしい見世物や相撲などがあつて賑ふので、此日は三里四里の遠方から山坂を越えて老若男女が參詣する。小畑家は舊家のことであり親類縁者も多かつた爲に、近村を始とし丹後邊りからも大勢の客が來て、中には泊りがけもあり、晝となく夜となく酒宴を張るので、君の母堂などはお稻荷さんの祭だといふと數日前から下女下男を指揮してその準備に掛り、夜の目も眠られぬ位の忙しさであつた。

一方安牟加神社の祭禮は陰曆六月十六日であつたが、同社は隣村の蟲生

にあるに拘らず、古來の慣例で小畑宗家から丸に梅鉢の定紋を打った笠鉾が出ることになつて居り、これが出ないうちは祭を始めることが出来ないで、定刻になると古式に則つて蟲生の村役人が小畑宗家まで出迎へに来る、そして村中の者がお供をして宮詣でとなる。宮の境内には舞臺があつて、兩村の子供が前々から練習して二組に分れて太鼓を打ち、古老は大聲を張り揚げて、

やんかん鎌倉の御所のお庭に植ゑたる唐松

やん唐松の一の小枝に御所のお鷹が巢をかけた

やん片羽がやぜぜの紅梅紫の

やんあら美事鷹の巢下し戀する姫に見せばや

と昔ながらの歌を節面白く謳ふ。その光景は如何にも鄙びて、太古さながらの趣があつた。

君は斯の如き武陵桃源にも比すべき平和郷に、天地自然の美と純朴なる人情に抱擁せられいとも幸福に育まれた。特に君は作右衛門翁にとつて

にあるに拘らず、古來の慣例で小畑宗家から丸に梅鉢の定紋を打つた笠鉾が出ることになつて居り、これが出ないうちは祭を始めることが出来ないので、定刻になると古式に則つて蟲生の村役人が小畑宗家まで出迎へに来る、そして村中の者がお供をして宮詣でとなる。宮の境内には舞臺があつて、兩村の子供が前々から練習して二組に分れて太鼓を打ち、古老は大聲を張り揚げて、

やんかん鎌倉の御所のお庭に植ゑたる唐松

やん唐松の一の小枝に御所のお鷹が巢をかけた

やん片羽がやぜぜの紅梅紫の

やんあら美事鷹の巢下し戀する姫に見せばや

と昔ながらの歌を節面白く謳ふ。その光景は如何にも鄙びて、太古きながらの趣があつた。

君は斯の如き武陵桃源にも比すべき平和郷に、天地自然の美と純朴なる人情に抱擁せられいとも幸福に育くまれた。特に君は作右衛門翁にとつて

嚴父
作右衛門翁

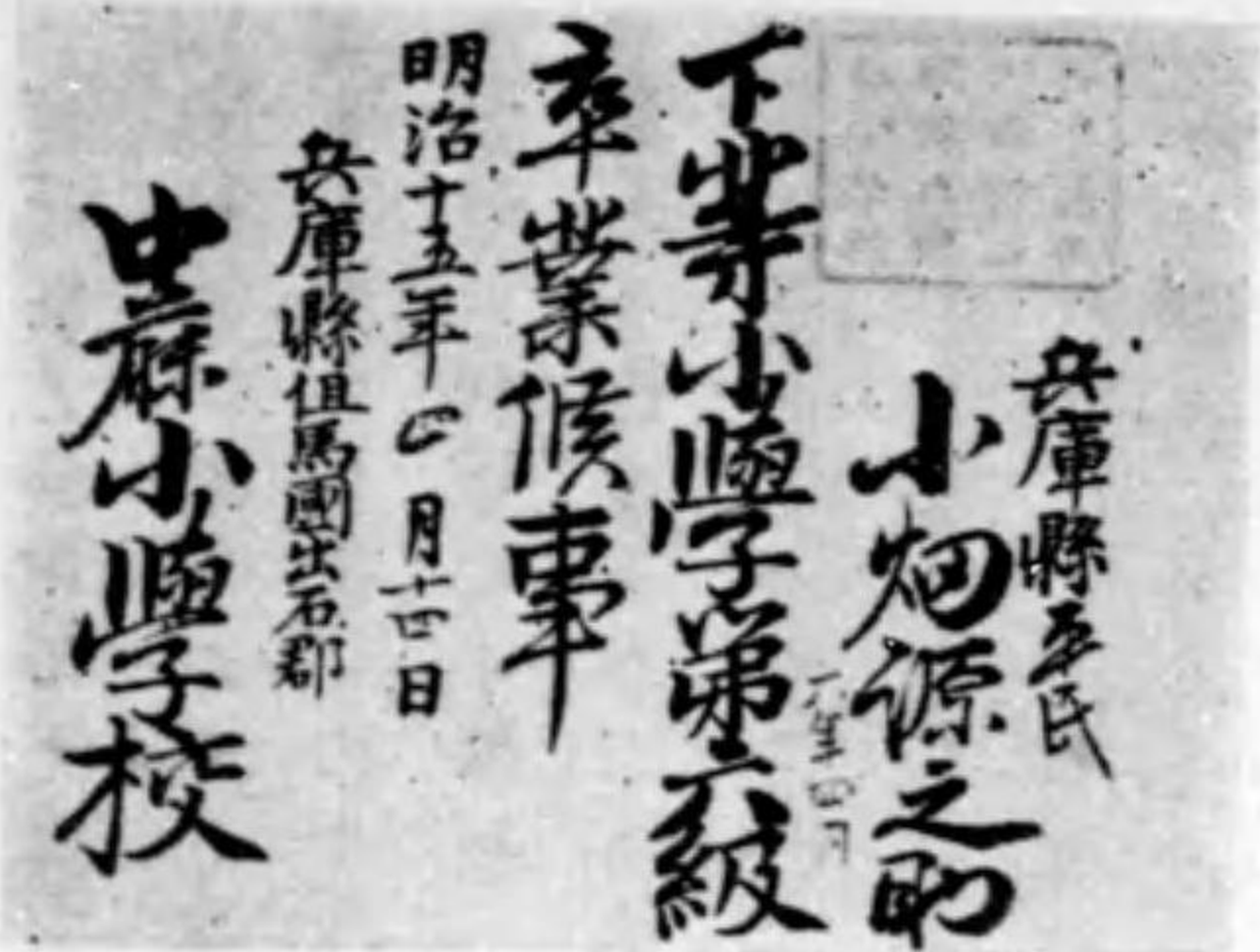


母堂
ゑい刀自

は俗にいふ四十二の二ツ子であり、而も長男であつたので、兩親の鐘愛は一方でなかつた。

作右衛門翁に就いては前に述べた如くであるが、母堂のえい刀自も流石に武家の娘として厳格な躰を受けただけに、萬事につけて上品で行儀の正しい人であつた。

君は斯る兩親の下に限りなき慈愛を一身に受けて一家和樂の中に人と爲つたので、幼年時代にはその性質が極めて溫柔であるのみならず、その容姿までが一見女子のやうであつたと傳へられる。従つて君は俗にいふ羞かみ屋で、初めて小學校へ入學の日、嚴父に伴れられて校門を潜つたものゝ、羞恥の念に堪えやらず直ぐに家へ逃げ歸つたといふ挿話さへある。それだけまた近所の子供と遊ぶにも、軍さごつことか相撲といったやうな勝負事は大嫌ひで多くは家の中に居て繪本などを見て喜んでゐた。ところがこの溫柔な性格は、小學校を卒へた十三四歳頃から一變して、見違へるやうに活潑になつた。



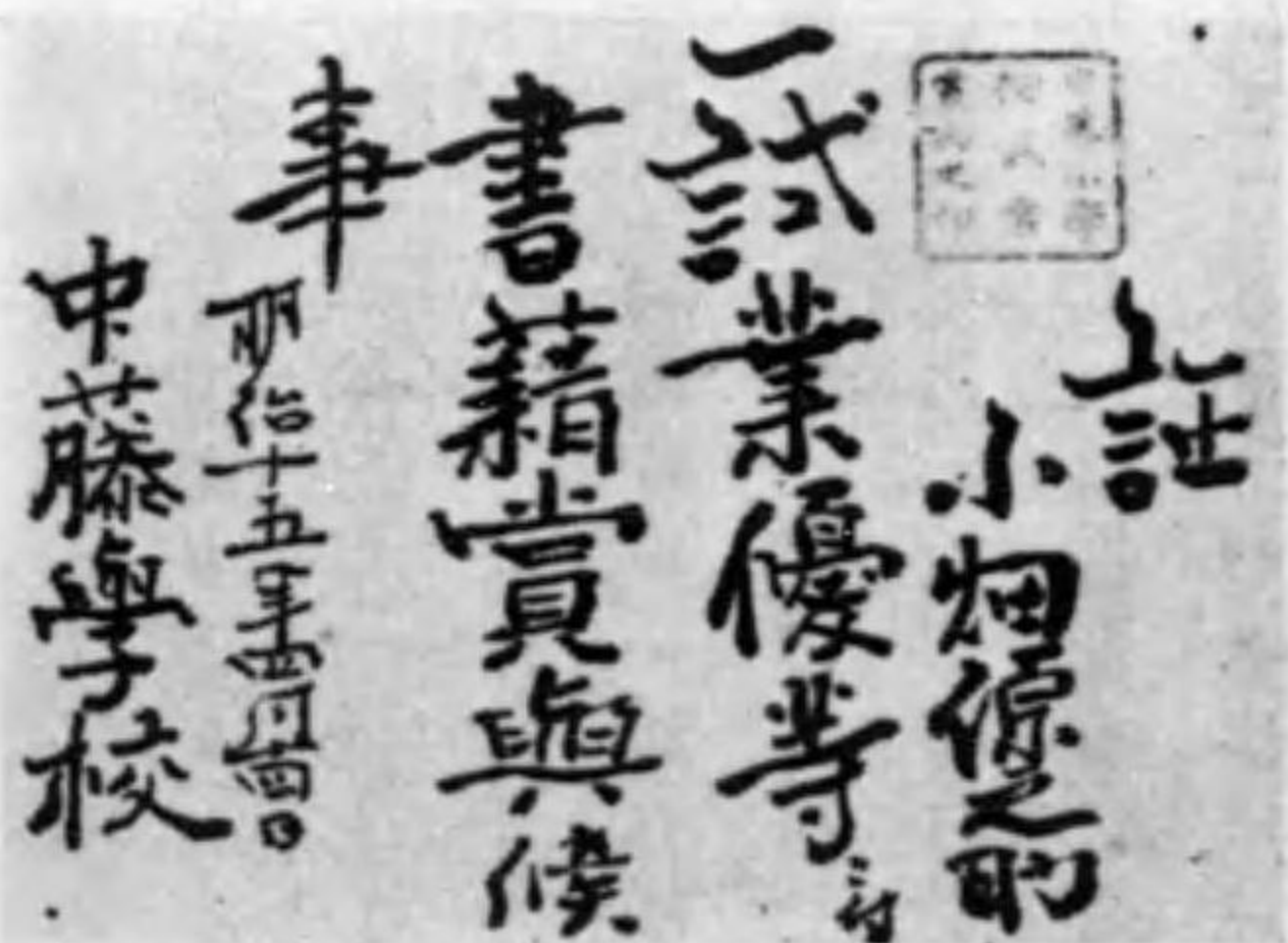
られてこの宮に詣で、社殿に額づくを常としたが、稍長するに及んでは屢々神域を去來して、時には少年らしい默想に耽ることもあつた。

修 學

明治十四年君は七歳になつたので、この年九月出石郡第七番學區村立中

藤小學校に入學した。校舎は同村の岩破本家が充てられ、教師は渡邊道郷氏であつた。翌十五年四月には下等小學第六級を卒業し次いでその年十一月には初等小學第五級を卒業した。兩度とも成績優等で書籍の賞與を受けた。十六年十月には小學初等科第四級を卒業したが、この時には試業優等賞と共に、出石・氣多郡役所より一等褒狀を受けた。それより同郡第四番學區の村立脩道小學校に轉じ、十七年十月には小學初等科第三級を、翌十八年五月には同じく第二級を卒業し、この年十一月小學初等科全部を卒業した。

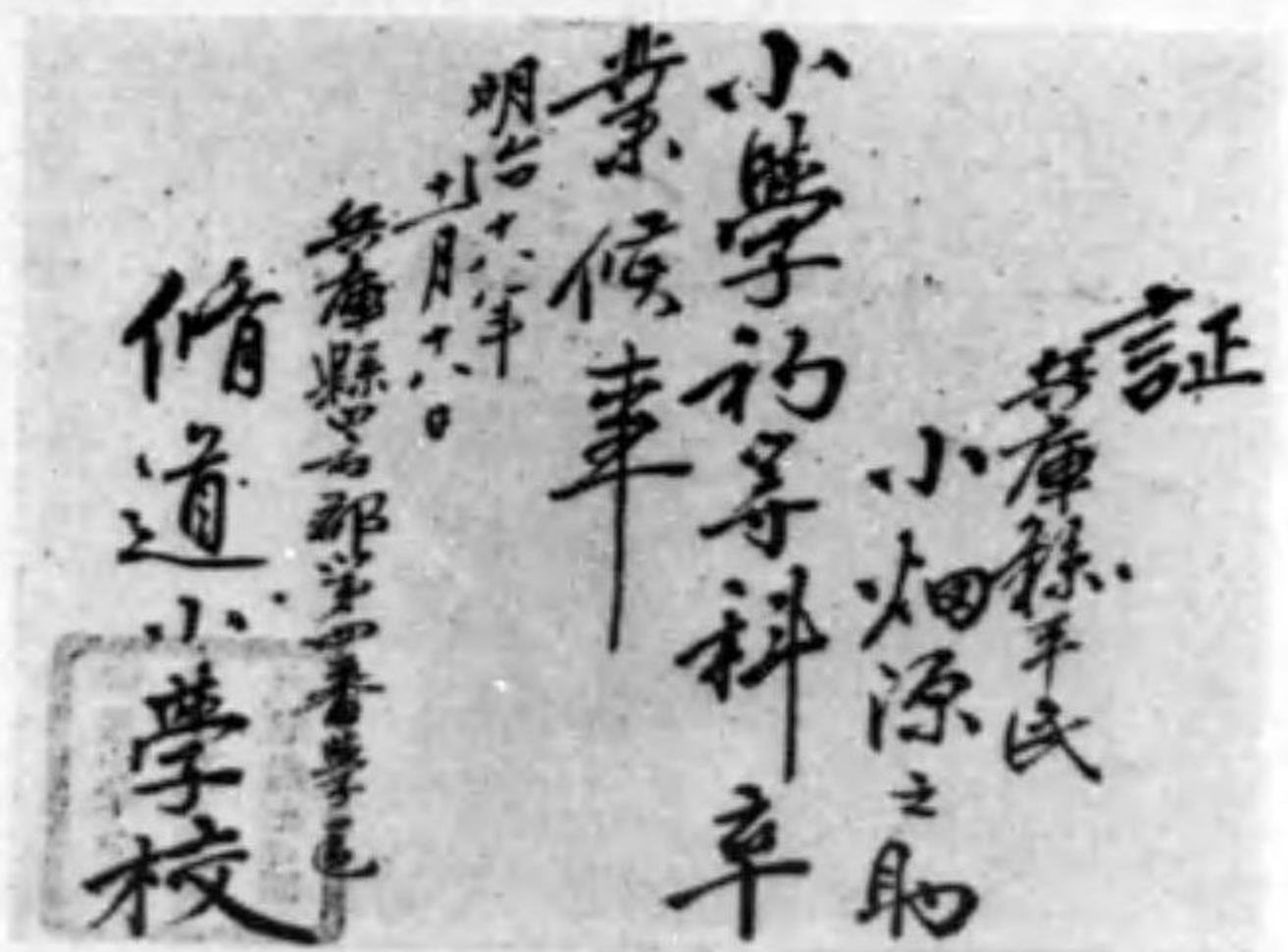
當時は但馬一國を通じて中學校の設備はなく、中等教育を受けんとすれば四十里を隔つる神戸まで出るの外はなかつたので、小學初等科を優等を以て終始し大いに前途を囑目された君も、家事その他の都合もあつて一先



づこれに進學を打切つた。

然し決して學業を廢した譯ではない。明治二十年君は十三歳に達し、この年正月中山村住持吉天徳山藏雲寺の住持矢野義旋和尚の門に入つて漢籍を學んだ。

論議し、憂國の至情眉宇に漲るものがあつた。君は學友岩破春平・澁谷柳市・藤本太郎吉等と共に、義旋師に就いて四書五經の素讀から漢學一般に互つて提撕を受けたが、その人格よりの影響は更に多大であつた。今日の君が一介の實業家を以て晏如たる能はず、國家・社會のために挺身事に當りつゝあるは、義旋師の感化に負ふ所が多い。師は後に大徳寺の執事に任



藏雲寺は臨濟宗大徳寺派に屬し、知覺普明國師を開山とする古刹である。

義旋師は諱を憲道松雨と號し、枯淡瓢逸、禪機横溢の傑僧であつた。殊に方外の身であり乍ら、常に天下國家を以て念とし、青年を愛し、時事問題を

舟中歌



(のもしせ削添を歌作の君) 蹟筆の翁成義岡富

じ、一山の内外に令聞があつた。

今一人君の少年時代の師として逸すべからざるは、舊出石藩士富岡義成翁である。翁は母堂ゑい刀自の實兄で君には伯父に當る人であるが、國學に達し和歌に長じ、書道は殊に堪能であつた。思想は極めて穩健であつたが、我が國體に關しては國學者一流の熾烈なる信念を有し、當時一世の風潮を爲した歐米心醉に強く反對した。翁の感化も亦君の人格を陶冶する上に於て大なる力となつた。

早熟の少年

君は元來早熟の少年であつた。年齒未だ十五に過ぎない明治二十二年頃

から、嚴父作右衛門翁の代理として村總代の事務を執つた。但馬の各郡ではこの年特別地價修正が行はれ、村役場はその書類調製に忙殺されたが、君は今日で云へば中學の下級生位の年輩で早くもその書類調製を手傳つた。明治二十二年の紀元節に憲法が發布され、次で翌二十三年には帝國議會が開設されたが、その年七月一日より三日まで第一回衆議院議員の選挙が行はれ、日本全國を擧げて政治熱が彌が上にも沸騰し、但馬の山奥もその影響を受けて日夜政客の來往が繁かつた。君も自然その雰圍氣に包まれて、政治に興味を持つやうになつた。

その頃の君の日記に、

縣道改修につき村民郡長の處置に慥らず、父上村の爲に大に奮闘せらる、予も亦之を助く。近頃辯論に興味を感じ漸く多辯となるに氣付き戒む。

とか、或は、

農を好まず、郷土に在りて小事に離礙たるに忍びず、志は政治家たるにあり、東京に出で實力を養はんと欲すれども父母の許を得ること難し。されど父母に背きて

脱出せんことは不孝の極なり、嗟などあるを見れば、その心境の一端が窺はれる。

君はまたこの前後から東京日日新聞や國民新聞を購讀した。國會開設に當り時勢を知らんがため、當時東京日日新聞には水戸出身の朝比奈泉氏が政府側に立つて椽大の筆を揮ひ、國民新聞にはその創立者たる徳富蘇峰氏が藩閥に對抗して平民主義を鼓吹してゐた。

君は草深き但馬の田舎に住む十六七歳の少年であつたが、此等の新聞を月明の夜は縁側に出て月光で讀み、さうでない晩は豆ランプの下で之を讀んだ。かくして世相の一斑に通ずると



君が三十歳の筆蹟

共に立志向學の念も禁め難きものがあつた。何と云つても交通不便の地とて、東京の新聞は四五日後でないと來ず、それに當時新聞を取つてゐたのは村中で君の家一軒であつた。

君はこの以前より父作右衛門翁に對して東京に遊學せんことを請うたが、翁は未だ丁年にも達せぬ最愛の一人息子を山河幾百里異郷の空に手離すに忍びなかつた。従つてその都度諄々と諭して思ひ止まらせ、君も亦兩親の志に背いてまで我意を通すことは不孝の極みであると考へ、懊惱の月日を送つてゐた。

明治二十四年（當時十七歳）の日記には、

余は硬骨なる新聞記者たらん。唯何を爲すにも此山村に於ては其用意を遂げ難し。世は日に進み一刻の猶豫を許さず。而も顧みれば我父母は老い給へり。嗚乎如何にすべきか。（一月某日）

此の文明の世に處し、身を立て家を起すの準備一日も後るべからず。學資は更に求めざれば半年にても家を出づることを許されたしと嘆願すること數回、終に父の

容さるゝ所とならず。慈愛の籠りたる訓戒を受けて止む。（三月五日）

余の志は遂げられざるなり。然れども余は時を待たん。曰く政治家、曰く新聞記者、曰く實業家、一生の中必ず一大事業を成さずんば止まず。唯光陰は矢の如く、一度去つて又還らず。準備は今の時也。空しく青春を過すべからず。（七月四日）とある。當時青雲の志望に燃えた君が、その意に任せず、如何に煩悶焦慮したかはこれ等の記述が物語つて居る。

青年會を發起

而も嚴父の許を得る能はず、一旦上京を思ひ止まつた君は郷里にあつて地方のために活動することに決心し、明治二十五年初春資母青年會を發起し、三月四日同志を語らつてその發會式を舉げた。これがこの地方に於ける青年會の嚆矢であつた。

元々口藤ヶ森以下十八ヶ村を含む舊資母郷の區域は、明治五年六月豊岡縣で大小區を置かれた際、その大部分が第三大區に編入されてゐたが、明

治二十二年四月町村制の施行と共に附近の字を加へて資母村と改稱し、東西二里、南北二里十五町、面積三方里強の相當廣大な地域となつたものである。

資母青年會では、最初縣會議員今田禎次郎氏を名譽會長に推し、君は幹事として牛耳を執つてゐたが、その年七月には幹事長に擧げられ名實共に會務を統ぶることゝなつた。時に君は年齒僅かに十八歳であつた。

この時分から君は更に獨學自修を思ひ立ち、當時東京に於て宮武南海氏が經營してゐた東京學館から英學・數學・簿記學等の講義録を取寄せ、又法律學經濟學は早稻田の講義録によつて、一生懸命に勉強し、傍ら前に記せし伯父富岡義成翁に就いて國學並に和歌を學び、その進境の著しきものがあつた。



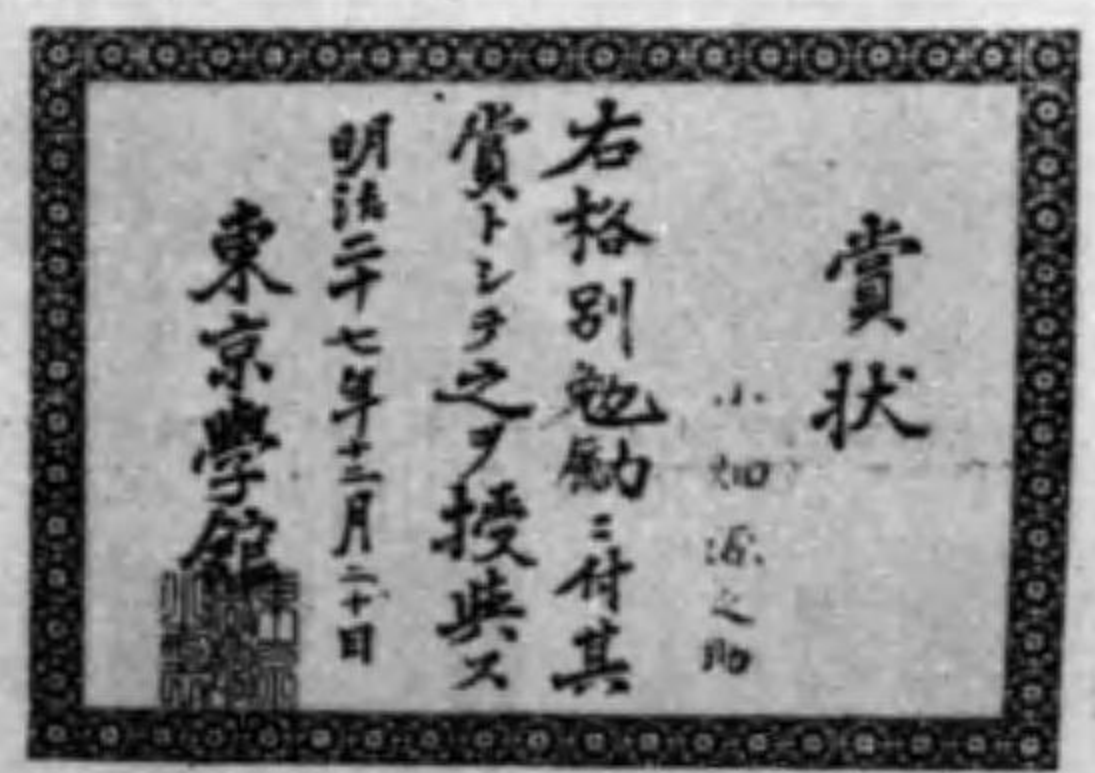
初めて京都に出づ

明治二十六年君は十九歳になつた。この年四月初めて嚴父の許を得て京都まで出遊した。但馬と京都とは丹波一國を隔つるだけで、里程からいへば知れたものであるが、交通機關の備はらなかつた當時では、その間に三日を費し、途中には五六の山坂もあつて、相當億劫な旅であつた。

ましてや君にとつては生れて最初の旅行ではあり、假令一時とはいへ、十八年間住み馴れた古郷の山川に別れるので、何となく名残が惜まれ、幾度か振り返つて人知れず深き感慨に打たれた。

立出てし我故さとはあし曳の

山のかなたにはやなりにけり



これが當時の君の詠である。村を隔て、歩一步と、我ふる里が山の彼方に隠れゆくを見ては、流石に別離の情の止め難きものがあつたであらう。

もとより京都までは徒歩で行くのであるから、草鞋の聞くもの、一として寂寥の種とならぬはなかつた。

花はいま越ゆる山路にほへともなくきめかぬる旅の夕くれ



脚絆の旅仕度で雨風の用意を爲し、但馬丹波の國境である小野原を舊道から越えて丹波路へと出た。何と云つても未だ十九歳の少年のひとり旅であつて、途中見るも

行き暮れてそそろ悲しき旅の空

遠くきこゆるいり相のかね

鳴きてゆく雁さへ友と思ふかな

たた一人なる旅のゆふへは

これ等の諸詠を見れば當時の君の心懐が察せられる。



君た出に都京てめ初

君は京都に着くと下京區油小路御前通上る所に同郷人の清水精一郎氏を訪うた。清水氏は資母村東里の生れで、同郷の佛門信者酒井與右衛門翁（桑次郎氏の父）に伴はれて京都に出で、本派本願寺の普通教校に學び、その後興教書院を起し佛書を出版してゐたが、氏は君の詞友酒井桑次郎氏とは竹馬の友であつたので、酒井氏から君を懇ろに紹介したのである。

清水氏は當時まだ書生上りで、普通商人とは違つて掛引もせず上手口も叩かず、唯誠實一偏で信用を博し、既に成功の緒についてゐた。殊にその人柄が親切で、本願寺の文學寮や大學林などの學生の世話をよくやいた爲に、その方面でも人氣があつた。



其頃の清水精一郎氏

田舎出の君が、桂邊りから日を暮して、初めて電燈のきらきらした京の街に驚いた夕べ、興教書院の店頭を叩いて來意を告げると、清水氏は一見舊知の如く「よう來んさつた」といつて、店の者に命じ洗足の手桶を出させた。その温情は、始めての一人旅で何事にも心寂しかつた君をしていたく感動せしめた。

爾來四十餘年、時に往來して舊時を語り合つて居るが、清水氏は堅實なる經營を以て興教書院の牙城を守り、近年老後の思ひ出として眞宗聖教全書出版の大業を企て、至寶の文献を斯界に遺すべく努力しつゝある。

京阪播州を歴遊

頃は恰も艶陽四月の半ばで、千年の古都は、花の京といはれる如く到處櫻の満開であつた。君は清水氏の家に客となつて、毎日のやうに洛内外の勝を探つた。祇園・清水・長樂寺、東山一帯の花も見た。嵯峨・御室・嵐山にも杖を曳いた。時には疏水を船で大津に行き、三井寺・石山寺に遊び、或は宇治に赴いて扇ヶ芝の古蹟や鳳凰堂等を訪ねた。殊に旅寓の附近にあつた日蓮宗本山の本國寺へは、散歩がてら毎日のやうに詣でた。

當時京都は近く開かれる第四回内國勸業博覽會の準備中で、會場の建設を始め神社佛閣の修理が行はれ、市中一般に活況を呈して居つた。また前田正名翁の主宰による五二會が開會され、翁も入洛中であり、市内の各店舗には、パツチ脚絆で尻からげし草鞋穿きで實業行脚中の翁の畫像を掲げて居るのを見た。

君は雨降りなどで外出せぬ時には、興教書院の店頭で主人の清水氏や店

員等と相語つて日を消したが、店頭に来る顧客は十中の八九が眞宗の僧侶で他は田舎上りの門徒であつた。また時には無聊を慰めるために店員に立ち交つて佛書などの校正もした。君が今日佛典に明るいのは、斯うしたことが縁をなしたのであらう。

旅寓の床間には、「世路羊腸千里曲、功名蝸角幾人間」と題した西郷南洲の一軸が掛つてゐた。南洲壯時の筆蹟で墨痕淋漓生氣躍動するものがあつたが、君は毎日この幅を眺めて英雄の襟懷を偲び多大の感慨に耽つた。

斯くて京都に滞在すること二ヶ月餘、歸途奈良を觀光して大阪に到り、神戸を経て播州の諸名所を訪ね、七月の初めに故山に歸つた。この行は君にとつて一箇の漫遊に過ぎなかつたが、その知見を廣め世態人情に通ずる上に裨益したことは多大であつた。

なほ君は歸郷後、旅行中の見聞並に感想等を、「旅狀漫記」「客中任筆録」の二冊に綴つて知友間に回覽せしめた。

『少年園』『文庫』に投書

この前後を通じて君は、當時東京で發行されてゐた「少年園」や「文庫」などに詩歌文章を盛んに投書した。君は必ずしも文學青年といふ程ではなかつたが、生來文藻に富んでこれを筆にすることを好んだ。且つ但馬の片田舎に在つて遊學の志望が達せられね鬱屈の氣を伸すには、斯うしたことが唯一の慰安でもあつた。

「少年園」は當時教育界の俊秀として名聲のあつた山縣悌三郎氏の主宰する雑誌で、駒込の少年園から發行されてゐた。「文庫」も亦「少年園」から分れた「少年文庫」の後身で、同じく少年園の發兌であつた。兩誌とも當時としては、全國無名の青年のために開放された文學雑誌で、毎號卷末に投書欄が六號活字で四頁乃至八頁附いて居り、敘事や抒情の文章や、和歌・新體詩・漢詩などが載つてゐた。特に「文庫」に至つては、文學青年の志を得る好適の詞壇で、當年の投書家で後に文士詩人として一家を成

した者も尠くない。今その重なる人を舉げて見ても、小島烏水・金子薫園
太田玉茗・河井醉茗・伊良子清白・横瀬夜雨・島木赤彦・中村吉藏以下十
指に餘るものがあるが、この他に現在の日本銀行總裁結城豊太郎氏や、故
法學博士吉野作造氏、刑法學者の牧野英一博士なども、かつては「文庫」
の投書家の一人であつた。

君は但山櫻州、但山樵夫等のペンネームを以て、屢々この兩誌に投書し
た。左に掲ぐる一文の如きもその中の一つで、二十歳以前の試作であるだ
け文章は稚拙を免れぬが、よく郷里村民の生活を現はしてゐる。

我が郷里

但山櫻州

四面青山を以て圍繞したる方數丁の一村、凡て五十の茅屋は高低定りなく田圃と
竹林の間に散立し、織れる工女と耕す田夫の外には足跡を入るゝものだになき清閑

寂寞の境、即ちこれ最も樂しき最も愛でたき我郷里なり。郷の北隅には數千年來の
舊社山姥稻荷と稱するありて村内二百の人民を加護し、其社地古松老杉亭々たる處
は我等が散策の好地たるなり。

村北の溪間より流れ出つる一線の清流は、貴き我等の飲料たる外、凍嗽の水とな
り沐浴の湯となり、猶餘りて千畝の田圃を潤ほせり。無邪氣の村童は此川流に蟹を
釣りに遊び、老いて猶休せざる村媪は此流邊に衣を洗へり。

螺線の細道には鋏を肩にしたる農夫行きかひ、田圃と桑園には俚謡の聲斷ゆるひ
まなし。此郷に起居する同胞は勤儉質朴にして、其多數は小學程度の教育さへ受け
ざれば目に一丁字なけれども、道義の念に至つては自ら少しも缺くる處あらず。彼
等は國政上のことには殆んど無頓着にして、時に國會議員の選舉競争あり時に政界
の大波瀾起るも、平然として唯明日の天氣をのみ氣遣へり。然れども彼等が胸中愛
國の熱情ある事は、方今日清交渉事件の喧傳し來るに際し、田畔の一顰にも半夜の
團居にも、これを談じこれを氣遣ひ、或者は切齒扼腕して憤慨するを以ても證すべ
きなり。

彼等の生活は實に單調にして、働いて食ひ寝ねて勞を忘るゝのみ、欺謀以て生を

送るものなく、策略以て計を立つるものなし。彼等が無上の快樂は、正月と村社の祭日と盆と節句なり。其他嘗て人爲的の娛樂を求めず、然れども自然の景自然の美は以て彼等を慰めつゝあり。春は態々花見に出でされども、彼等が行く處美花香はざるなく、夏は納涼に杖を曳かされども、彼等が茅屋の裏一樹の綠蔭は、後山の清風を呼んで自然の納涼地たるなり。秋は殊更に月見の宴を開かされども、彼等が小窓の下に家内團樂したる晩食の筵には、月光さやかに照らしつゝあれば、これまさしく月見の宴けなり。彼等は劇囃たる音楽を耳にしたる事なけれども、春の鶯秋の草叢の小蟲は自然の音楽を奏して彼等が耳朵を清めり。實にこれ天が與へたる勝景なり美音なり。

嗚呼樂しきかな此郷里、我父母も此郷里にあり、我朋友も此郷里にあり、吾又此郷里に永住して、一に事業を營みつゝ一に詩情的慾望を擡にせむと欲するなり。嗚呼樂しきかな此郷里。

此一文は博文館の懸賞に應じたもので、優等甲賞として日本文學全書十二冊を受領した。

投書家時代の君

今一つ「文庫」第一卷第四號（明治二十八年十月二十五日發行）に載つたものに左の一文がある。當年郷里に於ける君の日常を知るの料として茲に轉掲する。

一種の日課

山陰 小畑 但山

吾が生活は一種異様なり。一定規律ある學窓の下に勉學するものにあらず。また規則立ちたる職務に従事するものにもあらず。されば日日の課業とて整然定まりたる事あらざれども、そがうちにも自ら一の順序なきにあらず。いでや吾が一種の日課を録し誌友諸氏の一粲を博せむ。

夜寢も常に遅ければ朝起もまた常に遅し。太陽將に昇らむとして東方ほのあかく野に耕し山に樵らんとする村人は俗謡を歌ひつゝ家を出づるころ、吾は始めて樂し

き夢郷を辭するなり。毎朝前の小川に嗽ぎ、四方の青山を眺め、清き朝風に吹かれつゝ家の周圍を一回することの如何に樂しきよ。

吾家業は織物製造業なれば、數十の工男工女未明より起き出で、或は績糸器を廻し或は織篋をあやつれり。吾も朝食を終れば直ちに此工場に入り家業の一端を助くるなり。吾が執る所の業は繰糸器を運轉して糸を繰り捌くことなるが、一旦巻き揚げたる齒車の自ら運轉する間は、多く椅子に倚りて書籍新聞雜誌を讀むなり。書中たまたま妙篇あるときは、心自ら其方に移り、機械の運轉を止めたるも知らざること往々あり。

午前には半時晝食後に一時午後には半時は工場の休息時にして、吾は此時間を以て文を草し、詩歌を詠じ、又書翰の往復等を爲すなり。夕刻よりは全く工場を出で、書齋に閉ち籠りて書見する日もあれば、家邊の掃除をなす日もあり、又は隣村に友を訪ひ、或は村北の郊野に散歩す。

夜に入れば直ちに書齋に入り、一ヶの燈火と共に夜を更かすなり。正午送り來りし郵便物などの數多き日は、これが處理にかゝり、然らざる日は、或る獨修部より送り來る自習書の二三を修讀し、それより詩歌を作り文章を綴り、諸科の學書を研

究しなどして、毎夜十二時乃至一時までは眠らざるなり。將に寢に就かむとするとき、窓を開きて外面を眺むるを常とせるが、天地音靜かに月光さやかなる夜などは、實に身心も澄み渡り、歌句の二三は此時に得らるゝなり。

嗚呼これ吾が日課なり。雨降り風すさび花咲き葉落つるも、吾が日課は變ることなし。然れども時々隣村の友人が來訪するときは、臨時變更することもあり。

さてまた月に一回は親友の會合あり、東に一里西に半道、野や山を隔てたる吾友が一堂に會合し、茶菓を喫して快談壯語することの如何に樂しきよ。

吾生活はかくの如く無邪氣たり、吾日課はかくの如く單調なり。されども久しきことにはあらざるべし。

「一種の日課」に對する「文庫」記者の批評

○悠々自適氣樂千萬なる作者の生活羨むべし。(浩濤)
○篇末一段巧妙極盡、これ豈平地に波濤を起すもの乎。
單純なる田舎の生活ほど世に樂しきものはなかるべ



し。而かも適意に書を読み文を稿するの中には、王侯の富も換へ難き趣味ある愉快のなからでやは。(青嵐)

君はまた「文庫」誌上にしばしば和歌や漢詩なども投書してゐる。ここに號を逐うて轉掲すると左の如くである。

「文庫」第一卷第一號(明治二十八年八月二十五日發行)

首 夏 風

花ちらす仇とうらみし朝風の

・ 　　またる、夏となりにける哉

和田岬にてよめる

をくるまの和田の岬の磯なれ松

幾世の波をかけて來つらん

更 衣

やまの端もかすみの衣ぬきにけり

われもかへてむ花そめの袖

「文庫」第一卷第二號(明治二十八年九月二十五日發行)

十 六 夜 月

夕やみのせまりそめたる山松に

ほのめきいつるいさよひの月

「文庫」第一卷第三號(明治二十八年十月二十五日發行)

稻 田

ほなみたつ稻田の中を行く賤は

藻刈るあまとも見るへかりけり

月夜

殊更に何思ふとはなければとも

月すむ夜半はねられさりけり

「文庫」第一卷第四號（明治二十八年十一月二十五日發行）

行路萩

行きなれしわか深山路も糸萩の

花ゆゑ今日はめつらしき哉

山家秋來

八重葎茂りてさせるわか宿を

わけて音なふ秋のはつかせ

行路萩

路すから袖はぬれども糸萩の

露とし思へは嬉しかりけり

深夜月

秋風の身にしむまゝにねさめして

更け行く空の月を見るかな

深夜蟲

更け行けばわか世とはかり松蟲の

こゑいと高く庭になくなり

水邊觀螢

浴後携童出徘徊野水涯

柳條螢火亂涼影落清漪

竹亭午睡

脩竹千竿繞草堂

翠光經雨一層涼

曲肱閑臥清風裡

憂玉聲中入睡鄉

「文庫」第二卷第一號（明治二十九年一月二十五日發行）

閑居讀書

歛跡山村世事疎

幽窓閑讀一牀書

書編即是吾師友

溫故知新樂有餘

（評）虛舟曰、眞然眞然

當年投書家時代の君の文藻は、以上に依つてその一斑が推知されるが、それも今では半世紀に近い昔の事となつた。現在財界人として、將又國士公人としてその第一線に立ち、東奔西走寧日のない君にも、斯の如く各種

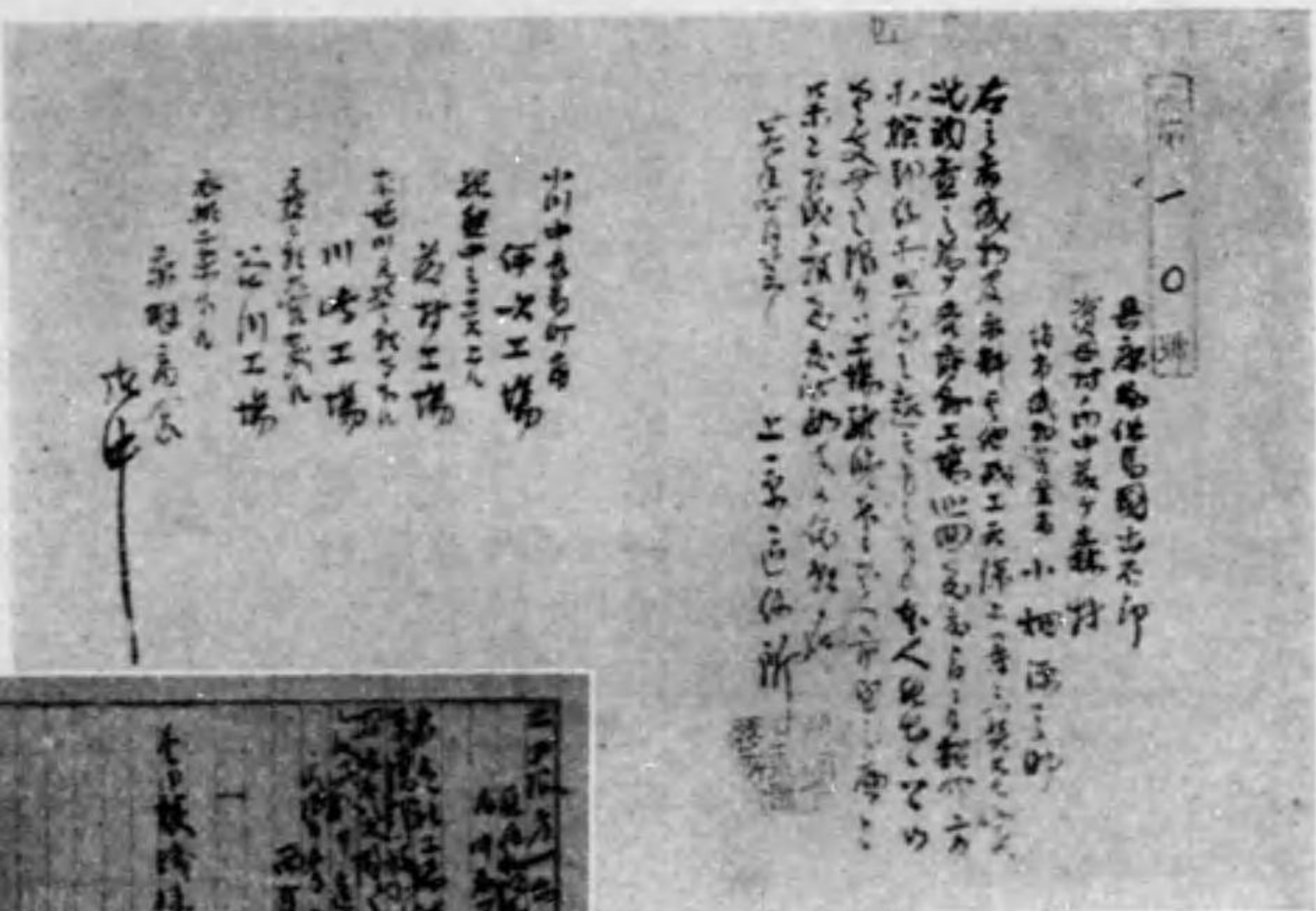
の文藝に憧憬をもつた若き日があつたのである。君にして往年を回顧すれば、種々の懐しき思ひ出が苧環の絲の如く繰り返されるであらう。

織物業視察

明治二十九年君は二十二歳になつた。この年四月出石郡長谷野孝氏の依頼により、織物業視察のために京都・大阪・滋賀・愛媛・香川・徳島・廣島・岡山・和歌山の二府七縣に出張した。これ君が將來事業家として世に立たんとするの第一歩であつた。

君の生家は世々農業の傍ら縮緬製造を以て業としたので、君も少年時代からその仕事に親んだ。長するに及んで、郷國但馬の民富が微々として振はないのを嘆じ、地勢人情の上から觀察して、織物製造業を盛んにすることが最も適當の方策であると信じ、挺身これに當らんことを決意したのである。

由來但馬は養蠶と牧牛を以て知られ、但馬の絹絲は延喜式の調庸にも現



上京區役所及西成郡役
所工場縦覽依狀



はれてゐる位であるが、但馬の織物といへば、國の最東隅三四の部落に縮緬生地シロモノの製造があるだけで、それさへ連年丹後に壓倒されて漸次衰頽に傾きつゝあつた。

偶々口清戦争に大勝を得て世間一般に事業熱が勃興し來つたので、君はこの機を逸せず但馬の織物業を振興するの計を樹て、先づその手始めに前記諸府縣の實地視察に出掛けたのである。

君は四月中旬出發して、第

一に京都に行き、市立染織學校や西陣の機業を見學し、特に西陣に於ては同所特産の綿ネルにつき調査を行ひ、新來の機械等に就いても研究した。次いで滋賀縣に入り、主として長濱に於ける縮緬業を觀、それより大阪に出で、金巾製織會社・天滿紡績會社・三軒家織布工場等を歴訪し、また商



織工市場時代の君(才二十二)

品陳列所で種々の調査をした。

大阪からは堺の綬通を視察して和歌山縣に入つたが、當時同縣は綿ネルの産地として全國の首位に居り、我國の綿ネル總産額百五十萬反の内百萬反は當縣下に於て生産されるといふ盛況であつた。従つて君も和歌山市外各郡に互り綿ネルの製造並に販賣に就いて調査し、偶々和歌山市に滞在中の綿ネル創製者瀬戸十助氏とも會談した。

それより四國に渡り香川・愛媛・徳島三縣下の綿ネル業を視察し、更に中國に引返し、廣島・岡山兩縣下を巡視して三ヶ月目に歸國し、その調査

の結果を出石郡役所に報告すると共に、視察要談を「染織新報」誌上に發表した。

斯くて君はこの視察旅行によつて、絹綿織物業に就いての智識見聞を深め、一層事業經營に確信を得るに至つたので、いよいよこれを實地に試むべく、近代式織布工場の設置に邁進することゝなつた。

織布工場創立

即ち君は同年九月同志と謀り、郷里出石郡に小畑織布工場を創立した。當時出資者は君一家の外には、澁谷柳市・岩破甚五郎・澁谷謙三氏等で君が専らその經營に當つたことは云ふまでもない。

この小畑織布工場は、勿論その規模の上から云へばさして大なるものはなかつたが、從來戸々の家庭工業としてその統一を缺いた但馬の織物業を聯絡統制して近代的企業組織の下に經營せんとする試みで、それだけ君の意氣込も大したものであつた。君は先づ國內に工女を募集し、本工場の

外に郡内各村に分工場を設置し、君自ら染織技術の傳習に當り、或は金融を按配し販路の開拓をはかる等、事業の全般に互り大童になつて活動した。

またこの頃より、京都の仲買商と縮緬の直取引を開きて家業の繁榮に資し、香川県内國益品展覽會に自家製造の縮緬兵兒帯を出品して、有功一等賞を受けた。

二十九年も末に近づく頃、小畑織布工場は完成し、綿ネル綿手巾等を少額ながらも製造し得るに至つた。自ら模範工場たらんことを期して一身を委ね、寢食を忘れて創設した事業が漸くその緒に就いたのである。君のこの時の喜悅は何に譬へんやうもなかつた。

斯くて小畑織布工場は順調に成育し、その主製品は但馬綿ネルとして三



丹・因・伯に開え、翌明治三十年には神戸に於て開催された第六回關西聯合府縣共進會にこれを出品して六等褒賞を受領した。

但馬織物會社

越えて明治三十一年には、工場の規模を一層擴大するの必要を感じ、豊岡の富商西垣勘次郎氏並に郡内の有志橋本・今井・宇野・平尾・太田氏等出資の下に、但馬織物會社を組織し、小畑織布工場の事業を繼承せしめた。そして君は同會社の取締役兼支配人となり一切の經營に任じた。

但馬織物會社では、その内部を綿布・絹布の兩部に分ち、綿布部では但馬ネルと綿手巾を、絹布部では小町襦子と風通織を、おのおの製造し、代理店を京都及び三丹の要地に設くる等、内外の充實とその擴張に努めたので、郡・縣の補助と相俟ち會社の事業は日を逐うて發展を見た。

君と但馬雜誌



この間にも君は毎月の如く詩歌文章を綴り、前記の「文庫」などへ投書してゐたが、明治三十年六月には、但馬村岡町の中村



重藏氏が、郷土雜誌「田舎」を發刊したので、君は同誌の贊助員として執筆を依囑せられ「農事試験場所感」以下の論説や各種の隨筆・和歌・漢詩等を寄稿した。

三十二年三月には、郷土の先輩兒山櫻井勉翁に依つて「出石雜誌」が創刊され、同年八月第六號より「但馬雜誌」と改稱された。君は同誌にも客員として屢々寄稿し、就中「縮緬製造業」

と題する長篇を連載して同業者間の注意を喚起した。



翁 勉 井 櫻 山 兒

櫻井勉翁は舊出石藩士で、幼にして郷儒堀田省軒・島村弘堂に學び、長じて江戸に遊び芳野金陵・中村敬宇等の門に入り、螢雪の學成り、維新の變革に會ひ、但馬藩權少參事・同大參事等に任ぜられ、次いで中央政府に仕へ、明治五年租稅寮七等出仕を振出に、内務大書記官、同地理局長、山林局長、徳島・山梨兩縣知事、臺灣新竹縣知事、内務省神社局長等に歴任して一世に名を成した傑物で、學和漢に通じ特に地理歴史に精しく「校補但馬考」その他の勞著がある。晩年は郷里出石町に隱栖して悠悠自適の生涯を送つた。君は翁の知遇を得て以來、翁の才學に傾倒し、その交際は昭和六年十月翁が易簣するまで渝らなかつた。

またこの時代の君の愛讀書は、古典では論語、當時の書では中村正直の「西國立志編」徳富蘇峰の「國民叢書」小説では矢野龍溪の「經國美談」などで、その愛誦する詩歌は、藤田東湖・頼山陽・西郷南洲の作、西行法

師・三位頼政の詠等であつた。芭蕉や蕪村の句にも一時は心酔したらしい。それから君の崇拜する人物は、西郷南洲を第一とし熊澤蕃山なども敬慕してゐたものゝ如く、以上は日誌や書翰などで之を窺ふことが出来る。

北海道旅行

明治三十二年七月には、但馬織物會社で製造する綿ネルや諸絹布の販路を開拓する爲に北海道に旅行した。君は豫め先輩櫻井勉翁に請うて、東京並に北海道に於ける官民有力者十數名に對する紹介狀を貰ひ受け、同月十四日出發、一旦東京に到りて用務を辨し、二十二日横濱埠頭から郵船會社の小樽丸に搭じて北行の途に就いた。

當時君の荷物といへば大行李一個と絹櫃一個で、大行李には綿ネル・綿手巾等の綿布見本を入れ、絹櫃には縮緬・襦子・風通織の見本を收めた。小樽丸は千五百噸の老朽船で、動搖甚しく、乗心地のよくない船であつたが、横濱を解纜して房總沖を廻り鹿島洋に出で、翌日正午には荻の濱に

着いた。これから函館までは直航であつたが、君は船中偶々陰曆六月十六日の月に會して遙かに故郷を偲び、

冷露濕衣天未晨 獨坐篷窓懷慈親

煙波渺渺望無極 橋上高懸月一輪

と口占し、更に船が北海道に近づくに及んで

休道海程千里長 輪船忽過太平洋

元期遂志酬鄉國 己認蝦洲氣更剛

と賦吟して、その感慨を洩らした。

斯くて函館に上陸、北海道に第一步を印した君は、同市に數日滞在後定期郵船薩摩丸で室蘭に向ひ、室蘭から札幌行の汽車に乗つた。始めて見た北海道の風物は何事によらず雄大で、廣漠たる原野や鬱蒼たる密林が車窓に展開し、その間屯田村が點綴して數多の壯丁が戎服の儘農耕に従事する有様などが異様に感ぜられた。

札幌は云ふまでもなく北海道廳の所在地で、明治初年以來開拓使が置かれ、外人技師を聘して其設計により建設した都市で、街衢整然大厦高樓櫛比し、頗る股賑を極むるものがあつた。

君は札幌に於て同區第一の旅館山形屋に投じ、日々用務を辨するの外、或は札幌農學校を訪ひ南理學博士の案内を受けて農園を見學し、或は札幌麥酒株式會社（當時植村澄三郎氏が常務であつた）札幌葡萄酒製造所・北海道製麻株式會社・札幌製絲場等を歴訪してその作業状態を視察し、大いに見聞を廣めた。

當時北海道に於ける第一の呉服店は、札幌に本店を置き道内各地に支店を有する今井呉服店で、その一年間に於ける綿ネルの販賣高は、本店だけでも三十碼物六千反に上つてゐた。君はこの今井呉服店と商談を遂げ所期の結果を得ると共に松居・林・小野諸店とも今後取引を開始することに就いての諒解を得た。

札幌に於て所用を果した君は、出石人田中讓氏の案内で、札幌・小樽間

の手稻といふ地に、當時北海道で始めて出来た水田を視察し、小樽では築港を見學し、更に札幌より五里を隔つる篠路村の山口農場に同郷人の移住して居る處を見舞ひ、茲に北海道一般の調査を終つて、約一ヶ月振りに八月中旬歸郷した。

前にも述べた如く、この旅行には櫻井勉翁の紹介狀があつたために視察上非常に便宜を得たので、君は歸郷するや早速出石町の隱宅に翁を訪うて厚く禮を述べた。翁は快く君を迎へて何くれとなく旅行中の事どもを尋ね、話次君から紹介先のことに就いて何等通信のなかつたことに及び、「人から紹介狀を貰つた時には早くその結果を知らせるがよい、紹介した者はそれに依つて改めて禮狀を出さねばならぬから」と諭されたので、君は今更の如く翁の言に感じ、爾來これを箴戒として後進のものにも語り聞かせて居る。

之より先明治三十一年十月、君は出石郡室埴村の内寺坂、中嶋庄三郎氏の長女靜枝と結婚の式を擧げた。當時君は二十四歳新婦は十八歳であつた。

即ちそれが現在の小畑夫人で、温良貞淑、爾後四十餘年に互り内助の功數へ難いものがある。

織物會社解散



君の中京上に會覽展物織

明治三十三年東京に於て開催された全國織物展覽會には、君は但馬織物會社の製品を携へて上京し之を出陳したが、その多くは農商務省商品陳列館の買上となり、展覽會の審査に於ては縮緬は二等、綿ネルは三等の褒賞を受けた。

君はまた同年六月、別に白縮緬の直賣を目的として合名會社大中小兄弟商會を設立した。社員はその姻戚に當る大同・中島二氏と君の三人で、君は社長に就任したが、この會社は翌三十四年六月解散した。

この年君は但馬織物會社の専務取締役に任じ、翌三十四年四月には創立

三周年に當るので、開業以來取締役支配人或は専務取締役として社務を統率し精勵努力した故を以て、同會社より感謝状を受けた位であるが、この前後よりして日清戦後の經濟界の反動と生絲の大暴落とは同業界に一大打撃を與へ、會社も亦餘波を受けてその運行が頗る困難となつた。

これを經營の中心者たる君に就いて云へば、元々君は郷國の産業を振興せんとするの理想に燃え、専ら郷土の利益と郷民の幸福のために精根を傾けて事に當つて來たのであるが、何と云つても未だ而立にも達せぬ青年で、社會の表裏人情の反覆に通せず、且つ事業成功の最大要素たる實地の經驗に於て缺くるところがあつた。それやこれやで、技術が豫想通りに進まなか



つたこと、販路が意の如く運ばなかつたこと、金融上にも種々の齟齬が生じたこと等が果となり因となり、この經濟界の大波瀾に會して遂に窮迫を見るに至つたのである。

そこで同年八月五日には臨時總會を開き善後策に就いて協議し、君は責を引いて専務取締役の辭任を申出たが、無條件一任を以て翻意を求められ、新たに今井・堀兩氏を相談相手に入れて難局の打開に當ることゝなつた。然るに會社のその後の狀況は毫も好轉せず、經營はいよいよ困難を加へたので、翌三十五年二月斷然解散することに決し、君はその清算人に選任された。

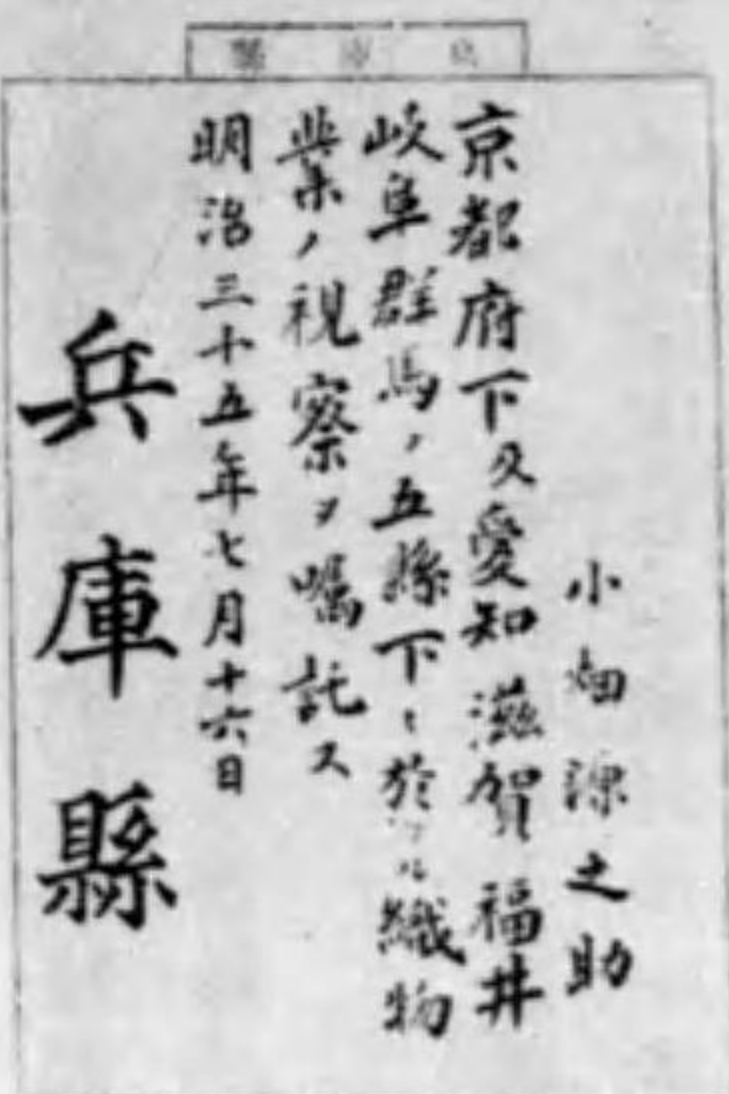
思へば君が小畑織布工場創始以來五年有餘の久しきに涉り、祖先傳來の家産を投げ出し、身を忘れ家を忘れ、寸金の報酬も受けず、全力を傾倒して孜孜挖々日夕怠らなかつた郷土の新産業も斯くして中道に挫折を見たのである。君は當時の日記にその顛末を敘し、最後に、

嗟、余が心血を傾け、日夜寢食を忘れて郷國の爲に盡瘁せし五ヶ年餘の

星霜は、茲に全く徒事となり了りぬ。と感慨を洩らしてゐる。まことにさもあるべきことで、今日より考へても

全く同情に堪えない。

因みに當時君の部下で働いた幹部社員は、
澁谷國藏・植田仁之助・下工垣慶次郎・酒井
與三郎・西村四郎等の青年であつた。
而して同年六月には、更に小畑絹布製造
合資會社を設立してその業務擔當社員社
長となり小畑本店の營業を繼承したが、



これは一面但馬織物會社の清算に便するためでもあつた。

二府九縣に出張

この前後より當時の兵庫縣知事大森鐘一氏（後男爵）は、縣費補助の關係もあり、但馬織物會社の解散を非常に遺憾とし、君に對し、今後縣とし

て絹織物業の發達を助成する政策上の事、並に當業者の取るべき經營方法等に就き、他府縣の實況を視察して相當の進言をして呉れぬかとの相談があつたので、君は時の勸業課長添田敬一郎氏と協議の上、縣囑託の資格で、屬官一名を帶同して、絹織物業狀況視察のため京都府外一府九縣に出張することゝなつた。當時君は年齒僅かに二十七歳の青年であつた。

既記の如く、君は明治二十九年四月出石郡長の囑託を受け、織物業並に紡績業視察のため二府七縣に出張し、更に三十二年七月には但馬綿ネルの販路を開拓するため北海道に赴いたので、今回は實に君に取つては三回目の視察旅行であつた。従つてこれ等の調査に就いては相當の經驗を積み、且つ但馬織物會社の經營に依つて實地に苦心したことも多かつたので、最早既に一個の企業家として調査研究に當るに十分なる資格を備へてゐた。

君のこの視察旅行は三十五年七月中旬より九月中旬に亘り、前後僅々二ヶ月に満たぬ短時日であつたが、その周到なる用意と犀利なる觀察の下に行はれた收果は頗る見るべきものがあつた。君は此旅行を終へて歸郷する

や、資母村中山の藏雲寺に立籠り、浩漭なる報告書を作成して、十月十日これを兵庫縣知事服部一三氏（同年十月大森氏と更迭）に提出したが、この間に勸業課長も更迭し、添田氏は去つて湯淺倉平氏（後内大臣）が着任してゐた。

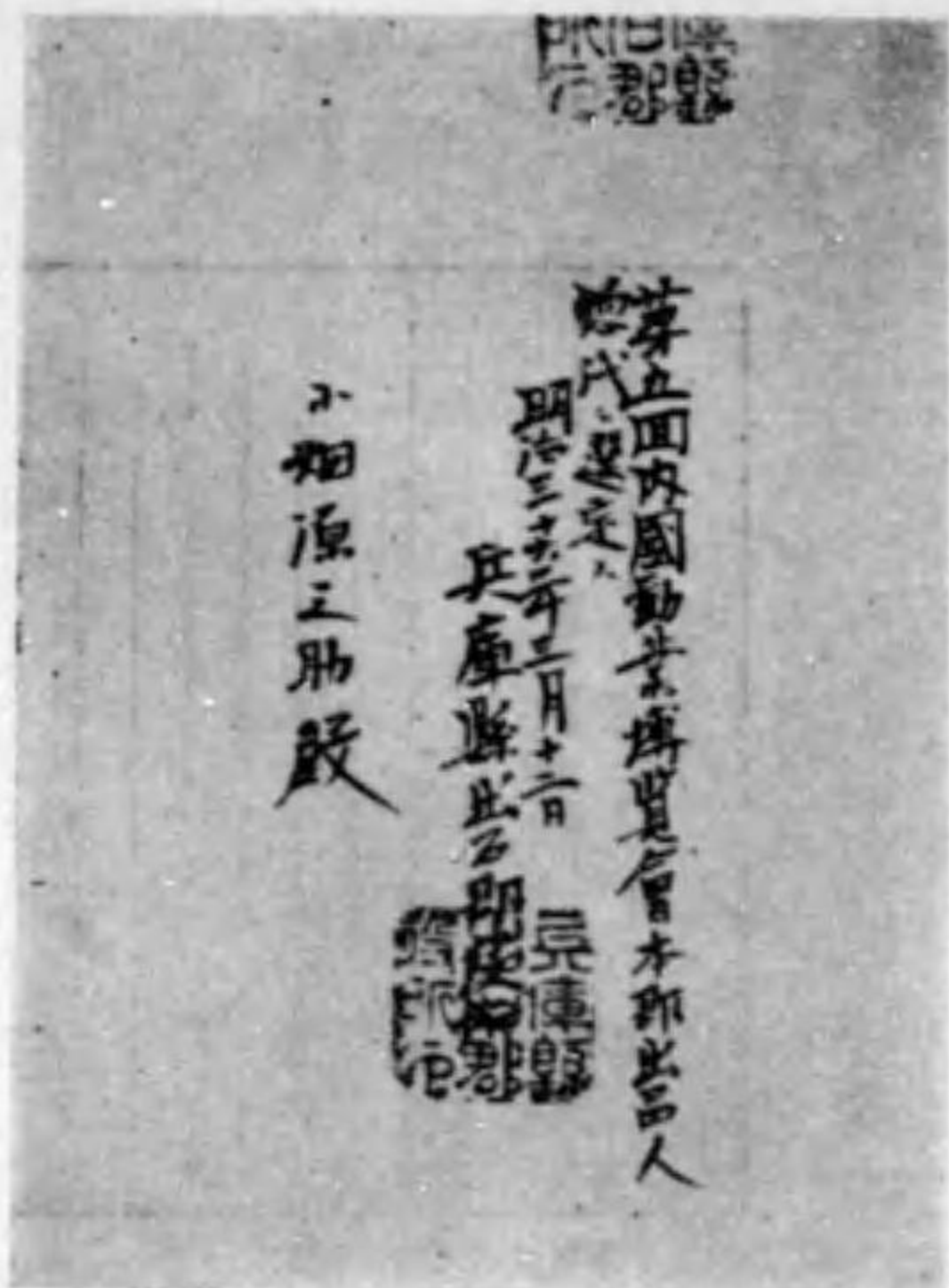
この報告書は翌三十六年二月兵庫縣第四課に於て上梓した「産業視察復命」中に収載され一般に公にされたが、その調査の正確にして且つ精密なる點に於て、この種報告書中出色のものといふべく、今日なほ當年の絹織物事業の概況と各府縣の助成施設を徴すべき産業史的文献として、相當の價値を有してゐる。

今その報告書中、冒頭の一文を掲記すれば左の如くである。

京都府外一府九縣絹織物狀況視察報告

余は御委囑により、絹織物業視察の爲め、去る明治三十五年七月十六日神戸を發し、十七日愛知縣に入り、名古屋市内及び知多・丹羽兩郡を巡回し、十八日東京に向ひ、

十九日より二十七日に至る十日間東京を根據として武野三州を巡視し、二十八日福井縣に至り、滞在二日福井市及び吉田・足羽・坂井・大野の四郡を巡回し、夫れより石川縣及び富山縣の海外輸出織物を調査し、八月一日富山を發して滋賀縣に戻り、長濱縮緬の産地を巡視し、同二日更に岐阜縣に向ひ、三日より五日に至る三日間岐阜市を中心として稲葉・羽島兩郡を巡歴し、八月六日同地を去り、三重縣を経て京都に入り、同八日より十三日に至る六日間同市に滞在して調査を遂げ、夫れより盆會の間を但馬に避け、八月十八日より再び行を起して丹後國中・竹野・熊野の三郡



を巡視し、二十一日之を了り、更に九月二日より丹後與謝郡を踏査し、同十四日歸縣、茲に全く此の業を終へたり。初め御委囑の視察地は、京都・滋賀・岐阜・愛知・群馬・福井の六府縣下に留まりしも、同業間に於て種々なる關係のあるあり、併せて東京・栃木・石川・富山・三重の一府四縣下視察の要を感じたるによ

り、此事業の結果をして完全ならしめんと欲し、中途これ等をも巡視することゝしたるものなり。

此の行や前後總日數僅かに五十餘日、此の短日月を以て多數の箇所を巡り、種々の方面より之を視察すること寔に至難の業たりしと雖も、熱心誠意夙夜怠らざりしを以て、其の結果尙かに御附託に背かざりしを信ず。左に所得の要領を記述し謹んで報告致候

明治三十五年十月十日

小畑源之助

兵庫縣知事 服部 一三 殿

當年の君の意氣

茲に一言すべきは、當年に於ける君が一箇有爲の青年としての意氣である。既に述べ來つた如く、君は明治二十九年僅かに二十二歳にして獨力以て織布工場を起し、次いで但馬織物會社を設立してこれが經營に全力を傾

注した。不幸にして事志と違ひ會社は解散の非運に逢ふに至つたが、而も君の念とせしところは、徹頭徹尾縣下産業の振興を圖るにあつて、一身一家の利害の如きはこれを度外に置いてゐた。即ちその目的とするところは

一に國利民福の増進にあつた。

君は後年（大正五年）日本ベイント大阪支店長時代に「我輩が青年時代たりし當時の青年と今日の青年」の一文を雑誌「商工帝國」に寄せ、その中に於て次の如く述べてゐる。

我輩は明治二十九年（當時二十二歳）郷里の兵庫縣に於て一織物工場を起し次いで之を會社組織に改め自ら其の取締役支配人・専務取締役となり、以來卅五年まで六年間、苦心慘憺一身一家を忘れ、事務員や職工と共に工場内に起臥し



て其の經營に任じたものである。此事業たるや、固より營利の目的で起したものでなかつた。即ち我縣は由來養蠶縣で有名な生絲の産地であるから、此の生絲に加工して絹織物にして出さうと云ふ計畫のもとに全く地方の公共事業として立案したもので、縣下の素封家に檄を飛ばしてその急務たることを懇へた、處が僅か二ヶ月にして滿株となり、一青年の我輩は會社の取締役に擧げられ、その經營の全部を託せられたのであつた。勿論重役としては一流の先輩が打揃うて顔を並べたが、事業の經營に就いては一人も嘴を入れるものはなく、全然打ち任せであつた。

そこで我輩は、工場の建築から職工の養成、技術の事、商賣の事、一切の責任を擔うて着々進行を圖り、即ち襦子・風通の類から、綿ネル・綿手巾・輸出向の紋壁絹縮などを製造して、三丹・因伯の需用地や京都及横濱の貿易市場へ出したのである。處が素より未熟者の計畫であるから幾多の遺算もあつたであらうし、且つ三十四年に至つて經濟界の逆潮に遭遇し、終に此の會社は解散の悲運に陥つたのであるが、その解散に及んで我輩は又その清算人に選ばれ、全責任を引受けて清算を仕遂げたのであつた。

それで會社は解散したけれども、一念營利に存せずして全く縣下産業の爲に身を

以つて盡くす考でやつて來た事であるから、誰一人として之を非議する者はなかつた。我輩自身としても、父祖の資産を無くしたけれども毫も遺憾とは思はなかつた。而已ならず、當時扶植した此の事業は幾變遷して今日では工場工業として著しき發達を遂げ、縣下に於ける一廉の産業となつてゐるのを見て衷心より喜んで居る次第である。

尙青年事業家として君が終生忘れざる感激を心に印し、堅忍發奮の素地を固めたのは、明治三十五年十一月と同三十六年四月の兩度に互り、天皇陛下御西下の砌、其製品御買上の恩命を拜した一事である。前の時は輸出向薄縮緬一尺八寸幅六丈物一疋、後の時は無地佛蘭西縮緬廣幅物一疋で、何れも天覽を仰ぎたる縣下物産三百餘點の中より、前は七點後は九點の御買上があり、其一としての光榮を荷うたのであつて、當時縣下の各新聞に無上の榮譽として詳しく掲載された。

第二章 京都在住時代

大雪の中を京都へ

前章に於て述べた如く、君は但馬織物會社解散後に、獨力を以て小畑絹布製造會社を設立し經營したが、その業績は餘り面白くなく、兎角するうち前後三年を経過し、この儘繼續して行けばますます窮地に陥る許りといふ見透しがついたので、明治三十七年の一月、遂に意を決して郷里の事業を打切り、京都に出向かふことゝなつた。

由來京都は、昔から縮緬産地としての丹後中・與謝兩郡と商取引が盛んであり、その隣接地である但馬の一部とも縮緬や輸出絹布の取引があつて、君も從來中京の間屋筋や高島屋の輸出部・西陣の河井長藏氏等とは深い取引關係を結んで居つたのみならず、かつて出石郡長として在任中より親密な交際をつづけ、相共に但馬絹織物の振興をはかつた新井智三郎氏が、當

時京都に於て東京火災保險會社の支店長として羽振を利かしてゐたので、京都へ行けば今後の身の振方に就いても何彼の便宜があらうと考へたからであつた。

明治三十七年の一月といへば白露の風雲漸く急を告げて將に兩國の間に戦端を開かんとする際であつた。その月の二十九日、雷さへ陰鬱な山陰の冬、雪に埋もれた故山を後に、草鞋脚絆の旅裝束で、平常使ひ馴れた一僕を伴れて、老いたる兩親や最愛の妻子に別れを告げ、定つた目途とてなく、唯胸に將來の希望を抱いて我が家を出た君は、まことに萬感交々であつた。普通ならば、京都へ行くには人力車を用ゐて遠く播但線に廻るか、または小野原を越えて丹波路へ出るのであるが、折柄の大雪のために何れも行路は杜絶してゐたので、徒歩で途を丹後に取り白皚々たる雪の岩屋峠を越え、その日は加悦で一泊し、翌日も同じ雪の山路を歩き続け、河守から丹波にはいつて福知山へ出て、此處から汽車で京都へ向かつたのであつた。

新井氏と君

君は京都へ着くと、先づその足で四條烏丸東入東京火災支店長の社宅に新井氏を訪うて來意を告げた。茲で一應新井氏の経歴に就いて述べて置きたい。

新井氏は舊姫路藩士の家に生れ、夙に東京専門學校（早稻田大學前身）を出で官界に投じ兵庫縣屬となつた。そして間もなく出石郡長に任ぜられたが、氏は新進氣鋭の官吏として何事かを爲さねば止まぬ氣概をもち、その赴任と共に、郡内に於ける絹織物の發展と出石焼の改良とを企圖し、偶々君も同一の目標で、國産を起すべく織物會社を經營してゐたので、何時の程にか意氣投合し爾汝相許す仲となつた。また一方では、氏は京都の高島屋圖案部に居た金澤の人友田安清氏を招聘して出石に陶器試験所を設けその改良に當らしめた。斯くして着々治績の見るべきものがあつたが、中頃感ずるところあつて、郡民に惜まれながら出石郡長を辭し、東京に出て

農商務省に入り商工局の事務官となつた。その後又同郷の先輩武井守正男の推挽によつて安田家に入り、その系統事業の一つである東京火災の名古屋支店長となり次いで京都支店長に轉じ、君が氏を訪問した頃には京都の火災保險業界で牛耳を執るの地位にあつた。

君は新井氏に對し、事業窮迫の經過を述べて今後の方針を相談したが、最初は新井氏も君が郷土を去ることを賛成しなかつた。その譯は、君は一時事業上で蹉跌したといふものゝ、但馬では相當の地位と信用とを得て居る身であり、その回復は必ずしも至難ではない。然るに京都に來れば、多少從來の取引先や知人があるとは云へ、何方かといへば旅の空で、こゝで立起らうとするのは容易なことではない。寧ろ今まで通り國許に居て後圖を策するがよいと云ふのであつた。

併し君は、一旦覺悟を極めて國を出たのでその決心は牢乎として抜くべからざるものがあり、又國に歸つても四圍の事情が再起の望なきを見透し切つてゐたため、縷々その譯を述べ、新井氏も漸く君の説に同意し、知人

の間に紹介の勞を執ることゝなつた。

藤井氏へ紹介

斯くして最初に引合されたのが、江州出身の若手實業家藤井善三郎氏、（後善助）であつた。藤井氏は後に江州財閥の巨擘として京都を中心に活動し、衆議院議員にも數回當選して政界にも名を成したが、當時は未だ京都の實業界へ一步を踏み出した許りであつた。

之より先藤井氏は堀五郎兵衛氏を社長とする京都倉庫株式會社の監査役となり、更に取締役に移り、堀社長辭任の後を襲いでその經營に當つたが、同社は明治三十一年五月大火に逢ひ、倉庫の大部分と保管貨物の米・棉花・綿糸・綿ネル・砂糖・酒・葉煙草等を焼失して大損害を受け、惹いては保險會社との間に紛議を醸し、藤井氏は會社の代表者としてその責に當り大いに苦慮したが、この際に於て、新井氏は東京火災の京都支店長としてその間に立ち一臂の力を貸したこともあり、自然藤井氏との間に密接な關係

が生じてゐたので、偕てこそ君を同氏に紹介したのであつた。

新井氏は君を同道して、當時智恵光院中筋西北角にあつた店舗に藤井氏を訪ね、君の從來の經歷や事業等を詳細に話して何分の考慮を懇囑したが、



君の時當社入庫倉物織

一伍四什を聴き終つた藤井氏は、「どうもさういふ人は嵩が高く、自分のところの間口には這入り兼ねる」と云つて婉曲に斷つた。併し段々話をしてゐる中に、君が京都へ出て來たのは將來の大成を期するため事業の見習をするにあつて、別段これと

いつて報酬を望まないのみならず、どう云ふ方面の仕事でも喜んで當つて見る決心で居るといふことが明らかになつたので、さういふ譯ならと言つて、取敢へず藤井氏の事業の手傳をすることに話が纏まつた。

織物倉庫に關係

當時京都倉庫株式會社は、業績不振のために解散することゝなつたので、藤井氏は更に藤原忠之助・西堀清兵衛・原源太郎・辰己直三郎氏等と謀り、新たに織物倉庫株式會社を創立しようといふ計畫中であつたから、差當り君はその創立事務を見ることゝなつた。これ君が足掛九年間京都に在住し藤井氏を輔佐して各方面の事業に參劃した端緒であつた。

斯くて君は一旦國元へ歸つて諸事を片付け、舊正月を濟ませて再び京都に來り、同年三月新設の織物倉庫株式會社に入社した。そして八月には夫人並に長女和子、長男穰を呼び寄せて、上京區丸太町烏丸西入北側に借家を求め、始めて京都で一家を持つた。

是よりして君は織物倉庫會社の事務に没頭し、其年十二月には疏水運送倉庫株式會社の買収に着手し、翌三十八年三月にはこれを實行して疏水運河を航行する船舶の大部分をその手に收め、社名も織物倉庫運送株式會社

と改め、本店を西陣より岡崎に移し、君はその營業全體を統理した。

三十八年四月には丸太町の寓居を引拂つて一時南禪寺に移り、更に六月には白川筋三條北入堀池町に移つた。この間に嚴父作右衛門翁は宿痼の肝臟病療養のため京都に來り君の家に起臥し、又京都大學病院同府立病院に入院して治療を受けたが、經過思はしからず、六月二十九日遂に永眠した。

享年七十一であつた。翁は君が京都在住一年有半を出でず、漸く立脚の地を得んとするの際に逝いたので、後年の君の大成を見ることが出来なかつたのは返す返すも残念である。君としても亦この時代に於て翁の易簀に會したことは、今日から顧みて風樹の嘆に堪えぬものがあらう。

その後君はますます社業の發展に



店本社會式株庫倉西關

努め、三十九年四月には元京都倉庫所有の二條倉庫買収に着手し、その準備として建物全部を借入れ之を二條出張所となし、本業の外に委託販賣業をも兼ね、木材・木炭・蠶糸の三部を置き、又丹波綾部に貯木場を設け傍ら製材を行ひ、鐵道枕木の販賣をも營んだ。更に四十一年一月には織物倉庫運送株式會社を關西倉庫株式會社と改稱し、運送部を分離して倉庫業を主とし、四十三年九月には日本絹綿紡織會社より京都府愛宕郡白川村の土地三萬坪を買収して土地經營に着手した。またその間には、江商紡績會社の創立、京都貿易銀行の整理、近江屋合名會社及堀川捺染株式會社の創立、日本共立生命保險會社の買収等にも參劃し盡力した。

好箇のアシスタント

斯くの如く君は藤井氏の傘下にあつて、直接には倉庫・運送・製材・土地・建物等の事務を見、間接には紡績・製綿・捺染・呉服・絹絲・銀行・保險等の事業に關與し、藤井氏にとつては無くてはならぬ人となつた。ま

た君が斯く多くの事業に參劃して修練を積んだことが、後年日本ペイント株式會社を經營し、或は産業振興のために國家的活動をなす上に裨益したところのものは尠少でない。

この間にあつて藤井氏は政界に打つて出で、明治四十一年衆議院議員に當選して以來、憲政本黨幹部として非改革派の爲に戦ひ、四十三年には國民黨常議員となり、大隈重信伯をその邸に迎へ、四十四年には朝鮮視察に赴いたが、君は常に藤井氏の秘書格としてその帷幄に參し、文書の起草、政談演説、賓客の接待等にも當り、朝鮮旅行の際も藤井氏に同行して併合直後の各地を視察した、即ち一面から見れば君は藤井氏の事業關係に於ても將又政治方面に於ても好箇のアシスタントであつた。而かも斯く兩者の關係が密接不離であつたにも拘らず、その間には確然たる雇傭關係といふものはなく、云はゞ客分としての取扱で月々の手當も僅々數十金に過ぎず、君も亦多くを受くることを固辭した。

君はこの少き収入と國元に殘存した田畑の賣却などに依つて、辛うじて

一家の生計を支へ、而も飽くまで地位相應の體面を保ち、相當の家に住まひ、社交場裡にも出入したので、その内面の苦しさは並大抵ではなかつた。現に夫人の如きも粗衣粗食に甘んじ、日常の調度等苟くも無駄をせず、子供の仕度でも上の兒より順送りに用ゐて事を濟した位であつた。これが君

の次の時代を生む上にどれだけ役に立つたかは言ふまでもない。

藤井善助氏



或は石龍子をして性相學の講義を爲さしめ、或は松田霞城畫伯に就いて丹青の技を學び、その他茶の湯・謠曲等の如きも、夫れく師匠を求めて一通りは稽古を爲した。

斯くて京都在住九年間を通じ、君と藤井氏との關係は膠漆管ならざるものがあつたが、藤井氏もよく君の人物を認識して十二分にその手腕を揮はしめた。後年藤井氏は君の大阪在住十年記念會の席上に於て、當年を回顧して君に就いて左の如く述べてゐる。亦以て藤井氏が君に對し如何に信頼を置いて居たかの一斑を徴することが出来る。

私は小畑君の京都時代の九年間を通じて、始から終まで深き關係を持つた者であります。當時私は積極的に手を擴げ、倉庫・銀行・紡績・織布・電鐵・電燈・土地建物・生命保險等數十の會社に關係し、其創立に經營に或は整理に、複雑多種の局面に當りました。のみならず郷黨から推されて衆議院議員となり政治にも携はり、又育英救恤等種々なる公共事業にも關係致しまして、公私共身邊の最も繁忙を極めた時代でありました。此間小畑君は事細大となく、私の爲に最も誠實にして且つ練達なる相談相手となつて呉られたのであります。

世の中に役に立つと申す人物は左程澤山にはないのであります。其少い人物の中で大局に明かなる人は兎角事務の才に乏しく、又事務の才に長ずる者は多くは大局



君の代時來往京東

の達觀に缺くる所がある。一人にして兩者を兼ね備ふるものは洵に稀であるとは古來申しならはして居る所ではありますが、小畑君は能く此兩者を兼ねた稀なる人材の一人でありました。私が氣付きますことは早く已に小畑君によつて實行せられて居りました。思慮綿密、用意周到、まことに行届いた人でありました。而して之を貫くに一に誠意を以てせられ、私は滿幅の信頼をもつて君の助力に頼つたのであります。

江州系巨商と接近

君はまたこの時代に於て、藤井氏の關係により阿部房次郎・北川與平・田附政次郎・下郷傳平などといった江州系の巨商と接近する機會を得、此等の人々の關係せる會社の設立や、合併・清算等の事務にも幾度か參與したが、その間に於て、古來全國的に有名であつた江州商人の特徴に就いて

綿密に觀察することを忘れなかつた。江州商人は第一に理智的であつて感情に走らず、意志が極めて鞏固である。勤勉質素で無駄遣ひをしない。祖先を崇拜し傳統を重んずる。長幼の序が正しく親子兄弟の情誼に厚い。斯うした氣風は江州商人の長所であつて、其反面には多少の缺點も無いではないが、大體に於て、實業家として成功する素質を多量に持つてゐることは多くの實例の証するところである。君は敍上の如き江州商人の長所を自ら處世の上に體用すべく且暮心に掛けて來た。これも京都時代に於ける大いなる收穫の一つと謂はねばなるまい。

要するに京都在住九年間は、君にとつては絶好の修練期であり又雌伏時代でもあつた。君が後年日本ベイント株式會社に入社し、同社を主宰して今日の社會的地位を築くまでの準備は、全く此時代に於て養はれたといふも過言ではない。この意味に於て京都時代は君の一生中最も貴重なる期間として特筆さるべきである。

第三章 日本ベイントに入社

入社 の 経緯

君が日本ベイント製造株式會社（當時は斯く稱した）に入社し、京都を引揚げて大阪に移住したのは大正元年九月一日であつた。爾來君の生活と環境は一變し、君は日本ベイントの社務に全力を傾け、大阪支店長として業務の一大刷新を圖り、歐洲大戰後の反動に際しては、前任者の懇望に依り専務取締役に就任して同社の全經營を荷ひ、慘憺たる苦心を以て社内改革を行ひ、着々その業績を擧げて今日の隆々たる社運を築くに至つた。而して大正十三年十月以來社長の任に就き引續き今日に及んでゐる。故に君の後半生は殆んど日本ベイントの事業と終始し來つたといふべく、日本ベイントの歴史即ち君の經歷たるかの觀がある。茲には敘述の順序として、先づ君が同社に入るに至つた経路から記せねばならぬ。

明治四十四年の夏のこと、當時日本ベイントの取締役支配人であつた長谷川直藏氏は、君の郷友小林豊造氏の紹介状を持つて京都に來り君に會見を求めた。君は東山の料亭左阿彌に於て長谷川氏に會つたが、その用向は日本ベイントの大阪工場（當時支店の登記をせず、工場と呼んでゐた）に營業部長として入社 of 勸説であつた。勿論寢耳に水の話のこととて、君は諾否の答へやうもなく、唯一應話を聽き置くだけに止めてその時の會見は終つた。

當時長谷川氏に添書を附けて君に紹介した小林氏は、前に述べた同郷出身清水精一郎氏の實弟で、夙に東京高等工業學校教員養成所を卒業し母校の助教授となり、手島校長が工業教育視察のため米國に赴くやこれに隨行して海外の新知識を吸収し、大いに將來を囑望されたが、中頃御木本幸吉氏に知られて同眞珠店の工場長となり、後獨立して日本ダイヤモンド株式會社を創立しその經營に任じた。大正九年寶石仕入のため印度に渡航したが歸朝後幾何もなく時疫に罹り、多望の春秋を残して黃泉の客となつた。

小林氏は頭腦明晰秀才型の人で廣く友人間に敬愛され、同郷關係の長谷川氏とも親交があつたので、同氏からその話を持ち掛けられて、最適任者として君を推薦したものである。

君は長谷川氏と一度會見した切りで、この話は約一年間中絶の姿となつてゐたが、翌四十五年六月長谷川氏は再び入洛して熱心に君の入社を懇説し、試みに大阪工場を一見せんことを慫慂した。茲に於て君は同月十二日下阪して梅田驛前の瓢家で長谷川氏と落ち合ひ、同道して浦江の工場に行き、技師長岩村圓氏（岩村高俊男の二男）の案内で場内を一瞥し會社の近況をも聴取したが、何といつても塗料工業には君は全くの素人であつてその成功の程も覺束なく、且つは久しく京都の生活に馴れたために大阪移住の氣分は起らなかつた。

藤井氏の諒解

然るに長谷川氏は勿論岩村氏に於ても是非君を入社させたいといふ處か

ら、爾來根氣よく君を説き其奮起を促したので、君も漸く心動き、當時東京火災大阪支店長に榮轉してゐた新井智三郎氏にこれを相談して見た。新井氏は前章に記した如く君を始め藤井善助氏に紹介した人であり、君は一身上の進退に就いては誰は措いても一應此の人に諮らねばならぬ間柄であつた。

新井氏は君よりペイント會社入りのことを聞いて、「京都も相當に長いからこの際方面の變つた仕事をするのも面白からう」と一も二もなく賛成し、藤井氏に對しては自分から納得の出来るやう話をするといつて心安く引受けて呉れた。

その結果として新井氏から君のペイント入社一件を聞いた藤井氏は、最初は「我々江州系統の人の事業であれば、從來の交際と信用が役に立ち活動も容易であらうが、何等縁もゆかりもないペイント會社の如き全然畑違ひの仕事であるから輕々しく賛成は出來ぬ」と不同意を唱へたが、段々と事情を盡して諒解を求めたので、藤井氏も漸く折れ、「それでは兎も角も

やらせて見よう」と云つて快よく同意した。新井氏よりその由を聞いた君は改めて藤井氏を訪ひ、長年指導の厚意を謝し將來相變らずの交誼を頼み、一方長谷川氏に對し入社受諾の旨を回答したので、君の日本ペイント入りは茲にいよいよ本極りとなつた。

斯くて大正元年九月一日、君は京都を引拂ひ大阪へ移住することとなり、一家諸共京都驛を出發したが、驛頭には藤井善助氏を始めとし辰己・山下・飯田・多田・畑の諸氏其他關係會社社員等の見送りがあつた。當時浦江の大阪工場附近淀川堤に沿うて重役用の社宅があつたので、君の一家は其處に移り住むことゝなつた。

過去の塗料工業

日本ペイント製造株式會社は、その前身光明社並に光明合資會社を通じて本邦塗料工業の濫觴を爲すものである。由來我國は東海に於ける蕞爾たる島國で、山岳多く森林繁茂し、而も人口は稀薄であつたために、土木・

建築・造船・家具等悉く木材を使用し、自給自足して餘りあるのみならず、我が國民性も亦質朴簡素を貴び趣味として素地を喜ぶの風があつて、經濟上將又好向上これを塗覆持久するの要なく、従つて維新前に於ては近世科學の所産であるペイント塗料の如きは殆んどその必要を認めなかつた。然るに幕末黒船の來航以來鐵船を用ふることを知り、明治に入つてからは橋梁・車輛・兵器・建築等悉く西洋式を採用したために、西洋塗料の需要が一時に起るに至つた。

然るに我國に於ては未だこれに關する研究は行はれて居らず、その製造の如きは思ひも寄らぬことであつた。偶々帝國大學の前身開成學校に於て、ワグネル博士外數名の外人を聘して工作・製煉の二科を設け泰西製造科學の門戸を開くや、助教授に大和郡山出身の茂木春太氏があり、將來塗料及び顔料の我國に需要多かるべきを想ひ、公務の傍ら自家に小規模の製煉所を設け、その實弟重次郎氏をして亞鉛華外二三顔料の製造を研究せしめた。これが我國に於ける塗料工業の發祥であるのみならず、日本ペイント出生

の起源であつた。

當時諸工業藥品の國內で製造される物のないのは勿論、築窯材料の如きも自ら製作せなければ他に供給を仰ぐ途のない不便の時代で、茂木氏兄弟のこの研究に於ける苦心は全く言語に絶した。殊に氣の毒なのは、春太氏がこの研究央ばにして斃れたことであつたが、重次郎氏は亡兄の遺志を繼ぎ、如何にもして當初の目的を貫徹せんと念願し、堅忍不拔の勇猛心を起して、百折不撓前後七ヶ年の星霜を費やし、明治十四年に至り漸くその研究を完成した。

光明社と光明合資會社

茲に於て二三の同志に資金を仰ぎ始めて光明社なるものを創立し、東京三田に一小工場を設け、亞鉛華・光明丹並に各種ベイントの製造を開始したが、當時は未だ舶來品全盛時代であつて國産品は殆んど顧みる者なく、その經營上の困難は實に並大抵でなかつた。

然るに明治十六年に至り、茂木氏の事業は偶々川村海軍卿の認むるところとなつて、海軍の艦船に塗用する調合ベイント製造の命が下つたため、茲に一條の活路を得て、茂木氏以下従業員一同は勇氣百倍し、更に研鑽の歩武を進むるに至つた。次いで明治十九年には皇居御造營の事あり、光明社はその製品を獻納し幸ひに御採用となつて銀盃御下賜の光榮を荷ひ、爾後博覽會・共進會等に出品してその都度第一位の賞牌を受領し、漸次世上に認識され、聲價益々高く、需要は年と共に増大した。

その中二十七八年の日清戦争に際會し、艦船方面の需要は急激に増加し、従來の如き小規模の經營では到底一般の要求に應じ難きに至つたので、資本金十萬圓を以て光明合資會社を組織し、工場を品川町に移して設備と機械を一新したその規模を擴張した。爾來ますます製品の改良に努力したため、二十九年には帝國鐵道廳の指定工場となり、その他鐵工所・造船所等の需要も遂かに増加して、又もや製造能力の不足を來し、更に大擴張の必要に迫られたので、茲に意を決して株式會社設立の目論見を爲し、廣く

世間にその趣旨を發表するに至つた。

日本ペイントの創立

その結果として、明治三十年、伊豫の人田坂初太郎氏を中心として株式會社の發起に着手し、其年十月二十四日創立總會を開き資本金四十萬圓を以て會社を設立し、社名を日本ペイント製造株式會社と命じ、田坂氏は取締役社長に茂木氏は取締役技師長に就任した。即ち現在の會社はこの時に於て名實共に誕生を見たのである。

爾來社運は春風に帆を揚げ穩波激瀼の洋上を行くが如く極めて順調に發展したが、三十七年日露戰役に會して更に塗料の大需要を來し、工場擴張の必要より資本金を五十萬圓に増加し、大阪郊外西成郡浦江に一萬坪の地を求めて分工場の新設を企て、同工場は三十八年四月に運轉を開始した。斯くの如く規模の擴大を圖ると共に、一面製品の改良に銳意し、その間技師を歐洲に派遣して設備技術を見學せしめ、一日も研究進歩に努力を怠ら

なかつたため、その製品は内外の信用を博し、世の進運と共に需要はいよいよ激増して又復製造力の不足を告ぐるに至り、翌三十九年再び資本金を増加して百五十萬圓となし、その後數年に亙つて東京・大阪兩工場の擴張を續行した。

營業方針の轉換期

前記の如く、會社は發展に次ぐに發展を以てしたのであるが、唯茲に起つた問題は、時代の推移と共にその營業方針に一大轉換を爲すの必要に迫られたことであつた。從來塗料の需要先はその大部分が海軍或は鐵道等の政府官廳であり、此等の官廳に於ては舶來品驅逐國產獎勵の上から塗料工業に保護を加へたために、會社は一種の御用商たるの觀を爲し、一面他に競争者も現はれなかつたので、多年その販路を一手に獨占して最も安全に營業を繼續し來つたが、明治の末期より大正の初頭にかけて護謨・燐寸・電池等の諸工業の原料として塗料原料たる亞鉛華・光明丹の新需要が起り、



君が入社當時の本日のイベント本社

事業の範囲が擴大するに及び、規模ではあるが同種業者が簇出し、茲に漸く競争の形態を生ずると共に政府官廳に於ても從來の保護的指名購入を撤廢するに至つたので、會社は自然既往の營業方針を改めて他の方面に新天地を開拓せねばならぬ事となつた。

君が日本ペイントに迎へられて營業部長として入社したのは斯る際であつた。即ち會社の營業方針轉換期で、外部より新しき人材を入れて今後に對處するにあらざれば舊來の人々では局面の打開が望まれないと云ふ時であつた。

入社當時の生活

偕て記述は前に戻つて、君は大正元年九月一日足掛九年間住み馴れた京都を去り一家を擧げて大阪に移つたのであるが、日本ペイント大阪工場の所在地たる當時の浦江は、大阪郊外でも最も交通の不便な所であるのみならず、土地は低濕で蚊が多く、又水が悪い爲に飲料水の如きは私設淨水所から一荷幾許で買ふといつたやうな有様で、山紫水明を以て聞へた京都とは餘りにもその懸隔の甚しいのに驚かされた。當時の君の日記に依れば、

九月一日。午前六時一家五人（母上は丹後に）にて京都出發大阪へ移る。藤井氏以下多數先輩知己に見送らる。七時廿分着直ちに社宅に入る。

九月三日。社内の送迎會あり、得意先への披露會あり。水の不良、家の不備、交通用度の全然不便なるに家族泣く。蚊の多きと汽車の音響とにて夜眠られず。

とあつてその狀況が偲ばれる。君の一家の移つた社宅といふのは、開業當時東京から社長などが工場へ來ても土地が邊鄙で泊るところが無いので、

そのために造つた家で、相當廣い建物ではあつたが内部はお寺の庫裡のやうなガラン洞で、周囲には樹木一本無く、實に殺風景極まるものであつた。君の日記にも「家族泣く」とある位であるから、如何に一家の人々がこの土地柄と住居に困惑したか、想像出来るのである。

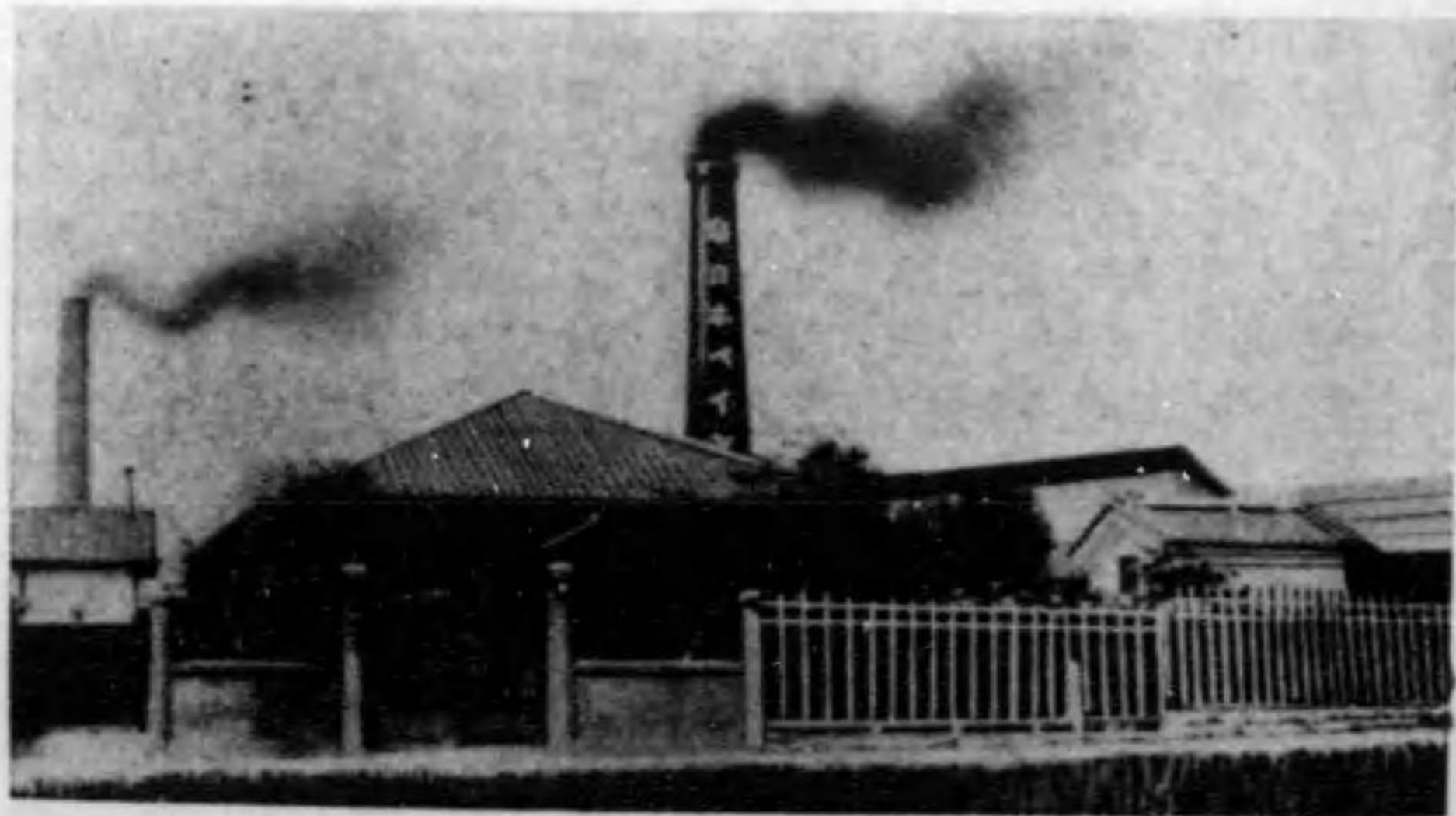
それに今一つ困つたことは、その勤務時間が朝の七時から晩の五時までで、相當長い上に時々用事の都合で居残りすることもあり、夜に入つて歸る日が多く、子供の顔などは見ることもない位で、京都にあつて比較的自由な生活をして居た君には、最初の間はこれだけでもなかなかつらいことであつた。

それでもどうやら辛抱して三四ヶ月暮すうちに、漸く環境に慣れて生活もし易くなつたと見え、翌大正二年一月の日記には、

四日。始めての社宅生活こゝに四ヶ月を経たり。萬事簡單にして虚飾なきところ京都生活と全然趣を異にす。お正月の日課として冷水摩擦・日向の讀書・子供の相手など。これも長き人生の一齣ならん。

と記してゐる。實を云へば斯やうな不便な生活や劇しい勤務は、最初招かれる時の話と全然違つてゐるので、君も幾度か罷めて歸らうかと思つたこともあり、東京に居る本社の重役も、君が愛想を盡かして逃出しはせぬかと心配したといふ事であるが、時の力と仕事の興味で漸くその單調な生活に居附いたのであつた。

當時の大阪工場には、技師長として岩村圓氏が居り、これに對立した營業部長として貴志富六郎といふ人が居た。然るに貴志氏は君の入社と共に社外に去り、君はその後任として營業一切を支配するのであつたが、君は塗料工業に就いては全くの素人であるから、萬事につけて俗にい



君が入社當時の大阪工場

ふイロへのイから學ばねばならなかつた。

その時代の大阪工場がどういふ状態であつたかに就いては、後年君の在社二十年祝賀會に於ける回想談の一節に、

日本ベイントにはいつて来るまでは、ベイントといふものには少しも知識がなかつた、はいつて來ても仲々分らない。併し今日のやうに細かい事まで知らなくてもよい時代であつた。來て驚いたのは、資本金百五十萬圓といへば當時稀に見る大會社であるのに、その仕掛の小さいこと、製品の貯藏なども一向見當らず、すべて注文を受けてから製造すると云ふ様な呑氣さであつた。東北の角の今の原料倉庫の一部が職工食堂であつたが、冬期に石油箱を焚いて暖をとらせるのでスツカリ燻けて眞黒になつて居た。其西手の川端にさゝやかな事務所と試験室があり、職工食堂との間に正門が設けられてゐたがホンの中譯的のものであつた。此の以前の（電車通りにあつた）事務所は、私が来る直前に出來たのだが、當時では近所に自慢の建物が長尺の米材を使つた頑丈な平家建であつた。私はその新しい事務所へはいつて仕事を始めた。食堂は八疊位で兼宿直室となつて居たが、晝の食卓を夜は寢臺に使ふといふやうな有様で、又その狭い所にはいる位しか社員も居なかつた。

とあつてその實狀が窺はれる。

斯くの如く當時の大阪工場は、その規模も小さく設備も不完全なものであつたが、君はこの間に處し、夙夜勵精して急速に事業に通曉し、着々將來の素地を築いた。勿論毎月の休暇の如きも職工同様朔日・十五日の二回よりなく、日曜も祭日も出勤して平日同様に事務を執つた。大正二年四月の日記には、「花信諸所より到れども此地花なく更に春を感ぜず」とあつて、花信に無關心なるが如くにして而かも惜春の情を洩らしてゐる。

かくして入社以來一年餘一心不亂に勉強してゐる中に、同年十二月には社内制度の變更が行はれ、岩村技師長は東京へ移り、新たに大阪工場に長を置いて商工兩部を統括せしむる事となり、君はその長となつた。

是よりして君は大阪工場の業務一切を管掌し銳意成績の向上に努め、翌大正三年四月には工場内の諸制度を改正し、各般の整理を斷行して從來の面目を一新した。又その年八月には工場の南側に阪神電車の支線が開通し、以前に比して大阪市内との交通が頗る便利になつた。

日本ペイントの發展

兎角する中に勃發したのが歐洲大戰であつた。大正三年七月全歐を擧げて動亂に入るや、歐洲製品の東洋輸入はこゝに杜絶し、舶來塗料が國內市場にその影を沒したのは勿論、更に一轉して支那・印度・南洋方面へ本邦製品の輸出が行はるゝに至り、一面また我國及隣邦支那の新興工業たる護謨・硝子・燐寸・蓄電池・電球・セルロイド・紙・化粧粉・印刷インキ等の原料として亞鉛華・唐の土・鉛丹・ワニス等の需要が驚くべき増加を來したので、會社は大正四五兩年に互り新たに大阪工場の大擴張を行ひ、傍ら原料自給の策として、福島縣野澤・埼玉縣大宮の兩地に於て亞鉛製煉の事業を起した。

然るにこの大擴張より來る供給の増加も忽ちにして消化され、内外需要の激増は底止するところを知らざる状態であつたので、會社はこの事態に應ずるため大正六年九月三たび増資を行ひ、從來の百五十萬圓の資本金を一躍五百萬圓とした。而して東西工場の第三次擴張を行つたが、この結果として會社の製造能力は劃期的に増強され、亞鉛華及光明丹の如きは何れも戦前の六倍乃至八倍となつた。

斯くの如く擴張に次ぐに擴張を以てし、他面製品の改良に努力し、國內の需要充足を全ふするは勿論進んで海外輸出に力を注ぎ、支那上海に駐在員を常置しまた印度及南洋に販賣員を特派して宣傳開拓に當らしめた。

かくて内外販路の擴大と共に會社の生産力も年額一億二千萬封度に上り世界一流の大工場に伍してその聲名を馳するに至り、國內に於ては陸・海軍・鐵道省・臺灣總督府・朝鮮總督府・南滿洲鐵道の指定工場として、海外に於ては支那政府印刷局・暹羅海軍府の顔料及ペイント類供給者として獨特の地位を確保し、又社製の亞鉛華は歐洲塗料界の泰斗として知られたる英國バレール社に原料として使用され其絶讃を受くる等、技術方面に於ても世界的に信用を博した。

會社の人事には此の間に多少の異動があつた。大正四年一月長谷川支配

人が辭職したので田坂社長（友吉氏、初代社長初太郎氏の養子）は君をその後任に擬し支配人として東京本社へ轉勤せんことを申し通じたが、君は別に考ふる所あり固辭して受けなかつた。その年九月には從來本社直轄であつた上海出張所を



支店長時代の君（大正五年）

大阪工場の所管に移し、十一月には大阪工場を改めて大阪支店となし、君はその支店長に就任した。

いよ繁忙を極めたのはこの頃からであつて、その年の末より市況は益々賑ひ、特に輸出方面旺盛を極め、工場能力大不足を告げて配給の苦心一方ならず、全従業員は累月夜業を續け、君は其總帥として此間を采配し精力の續く限り働いた。

大正五年五月には、君は業務上の用務を帶び滿鮮地方に旅行した。先づ途を朝鮮に取つて滿洲に入り、奉天・旅順等を視察し、大連に於ては當時

の滿鐵副總裁國澤新兵衛氏等と會談し、又車輛用塗料に就いて調査を爲し約二週間の旅程を終へて歸阪した。

之より先母堂をい刀自は、明治四十五年君が大阪移轉の直前から君の姉君うた子の嫁入先丹後中郡の大同家に到り起臥し、大正四年に浦江の君の家に歸つたが、五年八月下旬より身體に違和あり藥餌に親しむに至つた。そして九月に入つてからは衰弱甚しく終に同月十二日永眠した。享年七十五歳であつた。君は嚴父作右衛門翁を京都時代に喪つてから、國元より母堂を迎へ、孝養につとめたが、大正五年元旦の日記には、「母上健在され一家六口無事迎年す。只孝養の至らざるを屢々歎く」と記してゐる。君が日本ベイント大阪支店長として、漸く實業界の一角にその地歩を築くに至つたのを、母堂が生前に見て逝かれたことは、君にとつてせめてもの慰めであつたであらう。

君は前來記述の如く、一身の匆忙裡に父母を喪ひ、其生前に孝養の至ら



比遲神社社殿及拜殿

し、また後年其邸趾に建碑し、山城八幡圓福寺の境内に供養塔を建つる等、其至らざるを恐れ、種々と心を砕いた。

ざりしを嗟嘆して止まなかつたが、爾來追孝の機會を忘れず、明治四十四年歸國して兩親の生涯の地たりし藤ヶ森の小學校へ父翁の遺志を以て基金を寄附し、又大正十一年氏神比遲神社へ兩親の名を刻して石燈籠を献進し、その他同社社殿の修復並に菩提寺玉宗寺の再建に巨額の寄進を爲

第四章 日本ベイントの改革

會社經營の行詰り

全歐の大戦は引續き日本ベイントに好影響を齎し、大正六七年を通じて社業は益々繁忙を極め、海外の注文は引きも切らぬ有様で、會社は全能力を發揮して生産の擴充に努め、社員二百名、職工一千二百名を擁し、晝夜兼行で活動してなほも納期の延滞を來し、社内は恰も戦場の如くであつた。従つて會社の利益も増大し、大正七年十月の決算には、大阪支店だけの賣上高でも三百萬圓に達し、大正六年下半年期以來三營業期を通じて四割配當を行ふの盛況であつた。

この間に於て、君は大正六年十一月、會社の漆工部と齋藤漆店との合同で新設された大日本漆株式會社の取締役に就任し、また大正七年十一月の會社の株主總會には取締役に選任された。即ち君は日本ベイント會社に入

社以來六年餘にして重役の班に列したのであつて、その間の忍苦も亦想ふべきである。

丁度其月獨逸皇帝より休戦の提議があり、内外の景氣は俄然一變して經濟界に大衝動を起し、各工業會社は何れもこの狀勢に應じて事業の縮少を圖つたが、日本ペイントに於ても直ちに生産の制限と經費の緊縮を計るの方策を採り、年末には職工の數も約半減したのであつた。

翌大正八年十一月には、それ等の事情のために田坂（友吉）社長の辭任を見、定款を改正して社長制を廢し専務制とし別に取締役會長を置くこととなり、從來監査役であつた政界の古老井上角五郎氏が新に取締役會長に就任し、曩に一旦常務取締役に就任し幾何もなく辭して外遊中であつた長谷川直藏氏が歸朝して専務取締役となつたが、君は依然として取締役を兼ねて大阪支店長の地位にあり、其擔當の範圍に於ては大戦終熄後の狀勢に善處し着々として業績を擧げつゝあつた。

唯會社全體の上から云へば、大戦中の好景氣に乗じて事業の規模を極度

に擴張し福島・埼玉兩縣下に亞鉛の製煉所まで設けたが、四圍の狀勢が一變した以上現狀を維持して行くことは非常な困難であり、搗てゝ加へて大正九年に及び數年景氣續きの反動が現はれてバニツクを來し、金融の甚しき梗塞と共に各事業會社は悉く窮境に立ち、日本ペイントも之に洩れず、製品は堆積して捌口を失ひ、財政は極度に逼迫し、而かも人心は緊張を缺き一部綱紀の紊亂をさへ見るに至つた。これを大戦中の好況期に比較せんか、その榮枯盛衰はまことに槿花一朝の夢にも譬ふべきであつた。

改革の衝に當る

大正九年の六月二十二日、君は東京本社よりの急電に接して上京すると、井上會長・長谷川専務以下各重役並に田坂初太郎翁列座の席で會社の難局に就いての話があり、「現任重役は引退の止むなきに至つたから御苦勞ではあるが後を引受けてやつて呉れぬか」との事であつた。君は餘りに突然のことではあり、且つ現任者の眞意もよくは分らなかつたので、「先輩の

方が夫れ夫れ東京に居られるのに、自分のやうな者が大阪から出て来てさういふ事は出来ぬ、又斯様な難局を私如き者の力で立直す事は不可能だ」と言つて極力これを断つたが、如何にしても承知しない。井上氏の如きは君が再三固辭するのに對し、佛然色を作し、「全體永年の間會社の祿を食んで来た者がこれ程我々から頼むのに彼はいふとは不都合だ」と眞向から責め立てるといふ始末、田坂翁は「どうしても君が引受けぬと言ふのならば會社は解散するより外はない」といふのであつた。そこで君も義理と面目で後へは引けぬことになり、遂に意を決して挺身難局に當るの覺悟を極め、席上三四の條件を持出し各重役がこれを容るゝに於ては其求めに應ぜん旨を答へた。

其條件といふのは、全國諸所に散在する分工場を悉く閉鎖し附屬事業の塗工部・漆工部も全廢して事業の本體を東京・大阪兩塗料工場だけにする事。經營の中心を大阪に移し専務は大阪に於て執務する事。(當時社長はなく専務が會社を代表する制度であつた)諸般の制度を單純化すると共に

冗員を省き緣故の如何を問はず社員を約半減すること。事業の整理、人員の淘汰、制度の改正、債權の始末等は一々重役會に議らす専務の獨斷を以て決行する事等であつたが、列座の重役は誰一人として異議を唱ふる者なく、君にその一切を委せた。茲に於て君はいよいよこの難局を引受けて専務取締役の重任に膺り、單身會社を双肩に荷つて起つこととなつた。

當時社内の人心は動搖し、社員の如き碌々仕事も手に着かぬといふ有様であつたので、君は斯く決定した以上一刻も猶豫ならずとなし、その夜鐵道ホテルに於て改正社則を起草し、翌二十三日にはこれを發表すると同時に、東京本社の社員職工全部を集めて事茲に至るまでの經緯を述べ、左の如き言渡しを爲した。

自分は昨日圖らずもこの會社を一身に引受けて難局打開の任に當る事になつたが、調べて見ると社内の状態は意外に六ヶ敷なつて居る。連も短時日の間に回復するものとは思へない。就いては諸君が此の後私の尻について來るといふのは可なり迷惑なことと思ふ。世間一般はまだ夫れ程に悪くはないから、何か緣故があつてよい所

に行ける人は行つて貰ひたい。現在会社には二萬圓許りの退職手當金があるから、今出て行くといふ人にはこれを分けることが出来る、あとから出る人には手當さへ不確かである、此點をよく考へて臥薪嘗膽の覺悟でついて來るといふ人はついて來るもよい。たゞこの先何時昇給し得るか待遇のことなど今日のところ全く見當がつかぬ。花見遊山に行くのならば勤めもするが、食糧の不足な冬籠りをするのに勤めることは出来ぬ。諸君は後で思違ひのないやうに篤と思案をするがよい。

これに對し社員職工一同は大いに君の意を諒とし、何等不服を云ひ立てる者もなかつた。

數日後には大阪支店に於て同様のことを申渡した。唯こゝで註釋を要するのは、大阪支店は君が主宰して萬事に氣を配り用意周到な經營を行つて居たために、會社の行詰りに對しても別天地の觀があり、これといふ手傷を負うて居なかつた。また斯くあつたことが、今次會社の大改革に一大手腕を揮ふべく君が抽んでられた因由をなしたのでもある。

社内諸制度の革新

君は全責任を負うて會社の經營に當るや、先づ社内の諸制度を改革し人員の淘汰を斷行した。從來會社には三人の常勤重役があり、その組織も御役所式で繁文縟禮の嫌ひがあつたので、君は第一に本社なるものを廢し、事務の中心を従來の行掛りのない大阪に移し、専務は大阪に常勤することとし、次に人心を一新する爲に東西社員の大入換を行ひ、諸制度は飽くまで簡明主義能率主義を旨とし、自ら全體を統率すると共に東西の營業をも主宰し、社員工員の教養にも當るといふやうに、眞に文字通り三面六臂の活動を行つた。

ついで手を着けたのは工場の整理閉鎖と副業の廢止であつた。即ち會社が三十萬圓近くの資本を投下して日本全國は勿論、滿洲・朝鮮・支那に互つて仕事をしてゐた塗工部を廢し、福島縣野澤・埼玉縣大宮の亞鉛製煉所を閉鎖し、更に目黒の白鉛工場、王子の酸化鐵工場を廢し、會社の本業で

ある東京品川と大阪浦江の塗料工場のみを残した。

それから在庫品の調査に掛り、徹底的に之を活用すると共に得意先の整理に着手した。元來會社と得意先との關係では、當務者の不注意から一旦焦付を拵へると、それに惹かされて次第に深入し、段々大きくしてどうにも出来ないやうになつたのが大半を占めてゐた。故に君は之を整理するに當つて、今日までの貸は會社にも責任がある、借り手許り悪いのではなく貸した方も悪いといふ建前で、得意先に向かつて「既往の分は拂へる時に拂つて貰ふ、それは貴方に任せるから、そのかはり今日以後はこちらの新方針通りに應じて貰ひ度い」と相手の氣持に訴へたが、その結果は一錢の損失もなく多くの焦付を回収し得たのであつた。

斯くの如きやり方で片ツ端から整理處断して僅か四ヶ月足らずの間に大體の目鼻をつけ、着々新經營に移つて行つた。

尤も之は専ら東京本社の關係で、大阪支店の方は前にも述べた如く君の細心周到な經營のためにこれといふ整理の必要はなかつた。

記述は少しく前後するが、君が専務取締役就任すると同時に前任者の長谷川直藏氏は引退し、それと相前後して井上角五郎氏も會長の任を去り、これに代つて初代社長田坂初太郎氏が七十歳の老軀を以て會長となつた。勿論之は君の發案に基き、會社に貫祿をつける爲と長老に對する禮儀から考へたもので、會社經營の全權と全責任を君の一身に荷つたことはいふまでもない。

その年十月末の決算には、専ら人心を緊張せしむる目的から創業以來始めての無配當を斷行したが、時節柄株主總會にも何等の文句はなかつた。

さてこの新經營に移るに際して君がまづ考へたことは、人心の安定と社内的一致協力とであつた。それには會社の内情一切を従業員に開放周知せしめてその共鳴と支持を待つのが最良の方法であるとし、損益の計算から利益の分配法重役の取得する報酬額まで公開して苦樂共受の氣分を醸成するに努めた。斯くして萬事につけ秘密を無くすると共に、重役の報酬を減額し専務の扱になつてゐた交際費の如きは之を全廢した。而して其期に受

取つた交際費壹萬三千圓は従業員保護財團の基金として寄附した。これは随分思ひ切つたやり方であつたが、既に臥薪嘗膽を覺悟して會社の更生に當る以上、自ら抑制して報酬を減じ且つ又往々使途不明瞭に終る交際費の如きは辭退するが當然だといふ考からこれを斷行したのであつた。この一事は一般に好印象を與へ諸般の改革を實行する上に非常に役立つた。

着々効果を奏す

斯くの如く、君は卒先して他に範を示し、日夜寢食を忘れて勵精努力を續けたので、會社の業績は日に月に回復し、翌大正十年四月には二十五萬圓許りの純益を擧げて一割の配當を爲すに至つた。當時未だ君が改革に乗出してから十ヶ月しか経つてゐなかつたので、一般の世評は整理が餘りに早い、そんな配當が出来る筈がないといつて訝つた程であるが、事實はやはりこの急速度の回復を見たのであつた。

その後會社の状態は、恰も頻死の重症者が手術豫後の経過よく、日々滋

養分を吸収して以前に勝る健康體となつてゆく如く、意外にも早き立直りを示し、大正十一年四月には四拾五萬圓の利益を擧げて一割五分の配當を爲し、改革當初僅かに二十六萬圓の借財に苦しみ、工場財團を作つて勸業銀行から五十萬圓を借出す手續をした位窮境にあつたに拘はらず、一躍百九拾餘萬圓の現金を持つに至つた。當時我國の經濟界は一般に資金缺乏の極に達し、現金を持つ會社は殆んど無かつた位であるのに、獨り日本ベイントが資本の割合から見て不相應な多額の現金を所有するに至つたのは、君の改革が如何に機宜に適し顯著なる成果を收めたかを雄辯に物語るものと云へよう。

偕て君がこの成功を收めた一因として逸すべからざることは、特約販賣店に對する新制度の創設であつた。從來會社と特約販賣店との關係は、世間一般の通り單なる取引先としてつきあつて來たのであるが、君はこれを以て満足せず、特約販賣店と會社とを一體のものとして兩者の間に不可分の結び付を生ぜしめんことを企て、特約販賣店に對して會社の實狀を公開

し進んでその株主たらんことを勧めた。元來會社の特約販賣店は、關西方面には大黒會なるものがありその團結も鞏固であつたが、關東方面は個々に分れて統一がなかつたので、君はこの間に斡旋して惠比須會なるものを結成せしめ、後また東西兩會の聯合會をつくり、自ら世話役となつて、中には金融の手傳ひまでして全會員に多數の株式を所有せしめた。これと同時に従業員に對してもすべて株主たらしむべく、資金不足の者には自らこれを立替へてやる等、百方便宜の方法を講じて重役・従業員・特約店の利害の一體化を計る新方針を執つたのであつた。



本日ベイント會社再建の中君

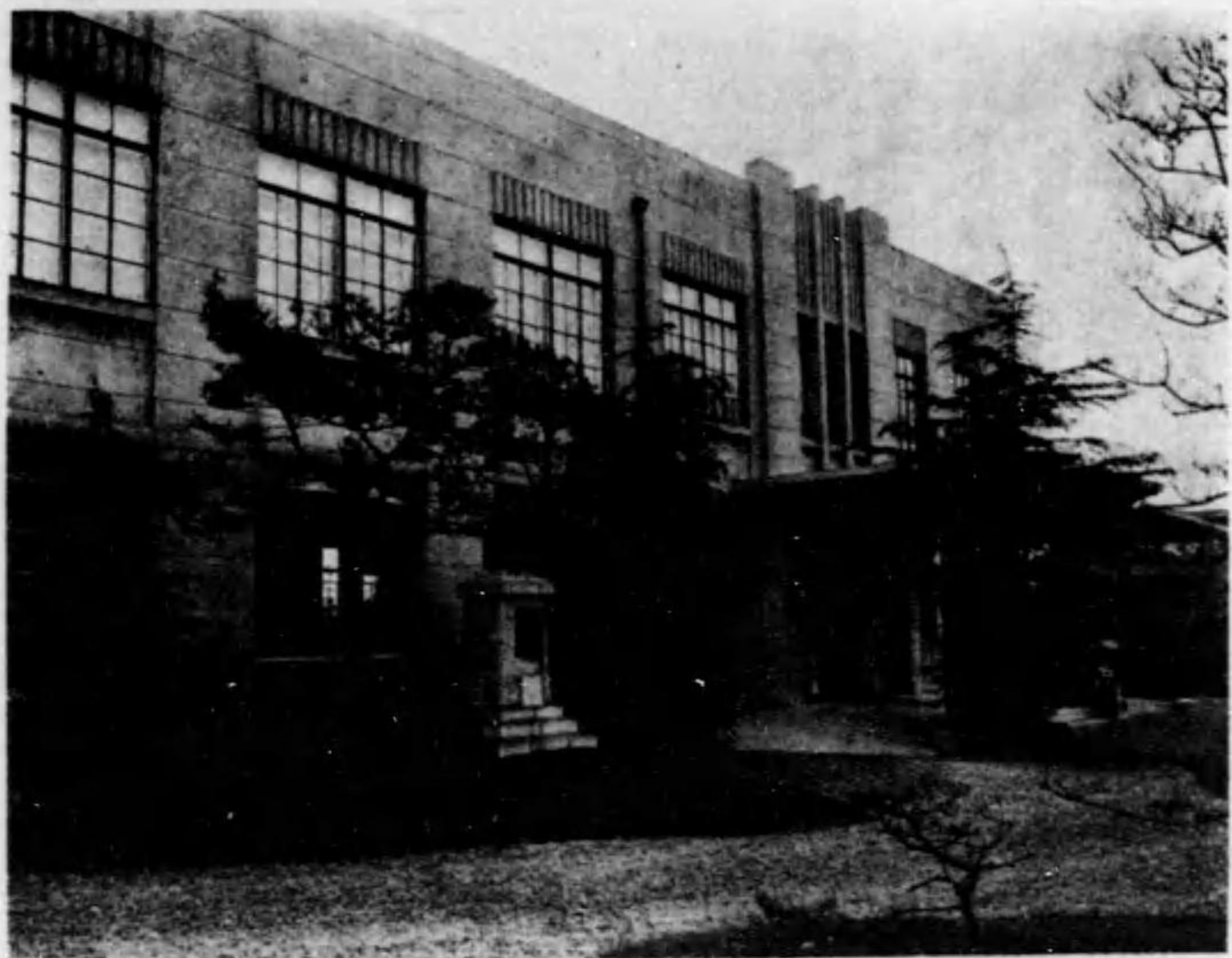
これが如何に會社をしてその内部の結束を固め堅實なる發展を爲さしむる上に効果があつたかは茲に喋々するまでもない。

斯くて日本ベイントの改革は、君の卓拔なる手腕と異常なる努力に依つて兩三年を出でずしてこれを成就するに至つたので、大正十二年頃からは

進んで將來の計畫を樹て、會社百年の大計のために、研究に設備に萬全の策を講じた。即ち大正十三年には大阪の事務所を、翌十四年には東京の事務所を夫れぞれ近世的建築として新造し、次いで東西兩工場を改築し、機械設備の充實を行ふと共に研究員を海外に派遣し、製品の改良進歩に意を用ゐて業績の向上を期し、本邦第一の塗料工場としての實力と矜持を確立するに努めた。

大正十三年七月大阪事務所新築記念青年修養會席上小畑事務の挨拶

閣下並に各位、極暑の折柄、實は本日の御案内を申上げるに付きまして幾度か躊躇致したのでありますが、此機會を逸しましては斯様な場所へ御足勞を願ふ事は又と得難いだらうと存じまして、不安乍らに御通知を申上げました處、斯くも多數に御尊來を辱うすることを得まして、誠に望外の光榮として深く感銘致し厚く御禮を申上る次第であります。此機會をもちまして當會社の歴史・業態・規模・經營方針等を申上げまして、聊御参考に備へ且つは御批判をも伺ひたい、殊に大正九年當會社が經營上行詰りを來たし、不肖私が餘儀なく其難局を引受けまして以來整理改善



君よつて改築された日本ベイント大坂營業所

に努めまして、一般化学工業の日に非なる最近の三四年間に、順調に社運の回復を實現し、内容の充實を完成致しました其経過に付きまして、詳細に御報告申上げ、其間に於ける各位の御指導と御聲援に答へますのが本意であります。今日は其時間を有しませぬからこれは後刻差上げます印刷物に就いて一斑を御承知願ふ事にいたしました。と存じます。唯一言私の所信を申上げますれば、從來我國一般の會社重役があまりに會社を私した嫌ひがあると思ひます。會

社は資本の集團であると同時に國民の集團でありまして、生産的國家の機關であり、國家に貢獻する處もあります。が、國家の保護も受けて居ります。株式會社だから株主のものだといふ様な見方は首肯することが出来ませぬと同時に、苟くも重役が之を私すべきものではないのであります。宜しく其經營方針を内外に發表して公正な態度で局に當り、一面營利の目的を進めると共に、一面従業員の國民的教養に力を致すべきものと考へます。斯様な見地よりいたしまして、此青年修養會の如きものを作つて居るのであります。

今日は設備萬端誠に行届でありまして、貴賓を遇するの禮を缺いで居ります。段は幾重にも御容赦を願ひます。終に臨みまして、重ねて大暑の折柄の御尊來に對し厚く御禮を申し上げます。

(團點の所言は資本主義全盛の時代に於ける君の經營の特異點として大いに注視すべきである)

事業經營の要訣

記して茲に至り、事業は結局人であるといふことを痛切に感ぜざるを得ない。日本ベイントが其の興廢の岐路に直面して君の如き眞摯にして練達なる事業家を起用しその手腕を十二分に發揮せしめたことは會社のために非常なる幸福であつた。同時に君に取つてはこの大なる經驗がその社會的地位と信用を確立するの基礎となり、君の今日あるを



君によつて改築された日本ベイント東京營業所

致さしめた要因ともなつたのである。

君は後年「經營三十年」の題下に、事業家として世に處して來た經歷を語り、最後に自己の體驗に鑑みて事業經營の要訣を左の如く述べてゐる。

- 一、事業の首腦者は一人一業でなくてはならぬ事。
- 二、事業は人である。金よりも制度よりも人に重點を置いて考へねばならぬ事。
- 三、經營は公明正大に、内外に開放して行ふべきこと、然らざれば眞の共鳴は得られぬ事。
- 四、一日も研究を怠つてはならぬ事。技術にも經營にも研究が事業の生命たる事。
- 五、何事にも機會を善用すべき事。
- 六、順序を無視してはならぬ事。
- 七、細心なる用意を爲す事と、物事に手数をかけることを惜まぬ事。

八、困難に逢ふ毎に進歩するから、受難を恐れてはならぬ事。

九、時代の推移に注意し、之に逆らはぬ事。

一〇、人格と事業の融合を計り、共存共榮の信條を實行すべき事。

蓋し此等は何れも君が自ら實踐し來つたところだけに、卓上兵を論ずるが如きものではない。一事一業に志す者は、何人と雖も肝に銘すべき金言であらう。



第五章 更生後の會社と君

青年修養會の設置

前來記述した如く、君は大正九年六月以來日本ペイントの改革に挺身し、天稟の才能と異常の努力とを以てこれを完遂し、幸に會社は隆々たる盛運を迎ふるに至つたので、君は一層業績の向上と將來の發展を圖るべく、事業は結局人であるとの信念に基き、社員・従業員の精神の修養と人格の陶冶に一段と心を配つた。その結果生れたのが大阪營業所内の青年修養會と東京營業所内の向上會である。この會では全會員を奉仕・教養・訓練の三部に分け、半年毎に其の所屬を替へて、役員には三十歳以下の社員を交代で當らせ、事業としては土に親しませるために奉仕花壇を持ち、又各種の同情行爲・奉仕行爲・講話會・修練會・社風作興會等種々の事をやらせた。又工員の方は四五十人を以て一團とし、尙武の會・信仰の會・厚生の會・

趣味の會・學問の會・貯蓄の會等多數の會を設け、同志の社員は共に會員となつて相互交代で世話役に當ることにした。何れも君が會長としてその中心たるは云ふまでもない。斯くして多くの社員従業員の心身兩面の向上をはかるために努力したが、その効果は頗る顯著なものがあつた。君の人格は普く社内に反映し、全員よく統一を保ちて節度に服し、往年社會運動旺盛を極め勞働爭議の頻出した際に於ても、日本ペイントは此域外に立つことが出来た。又東京の向上會は後に同一名となり、更に昭和八年滿洲國に於て日滿塗料會社が創立されるや、此處でも同會の成立を見て連綿今日に及んでゐる。

日本ペイント社長に就任

大正十年十一月には、君は取締役役に再選され依然事務取締役として全般の責に任じたが、取締役會長田坂初太郎氏はこの月病氣のために長逝した。越えて翌十一年五月、前年の改革に際し社外に去つた長谷川直藏氏が田坂

氏の後を襲ひ一時會長の椅子に就いたが幾許もなく辭任し、大正十三年十一月には長谷川前會長の發議に依り從來の會長制を廢して社長制に復舊し、君は株主總會に於て滿場一致の推舉を以て取締役社長に就任した。爾來今日に至るまで十有八年に亙り、引續き其の任にあつて名實共に會社を主宰してゐる。なほ會社名は昭和二年十一月の株主總會に於て「製造」の二字を除き「日本ペイント株式會社」と改めた。また昭和六年十一月二十一日本店所在地を創業以來の東京品川から大阪西淀川區浦江北四丁目十番地に移轉した。

皇太子殿下侍從御差遣

大正十四年五月 皇太子殿下大阪市に行啓あり、同月十九日特別の御沙汰を以て侍從牧野貞亮子爵を日本ペイント大阪工場へ差遣あらせられた。君は當日社長として侍從を奉迎し、他の重役と共に工場内を隈なく御案内申上げた。當時侍從御差遣の光榮に浴したのは大阪府下六千餘の工場中僅

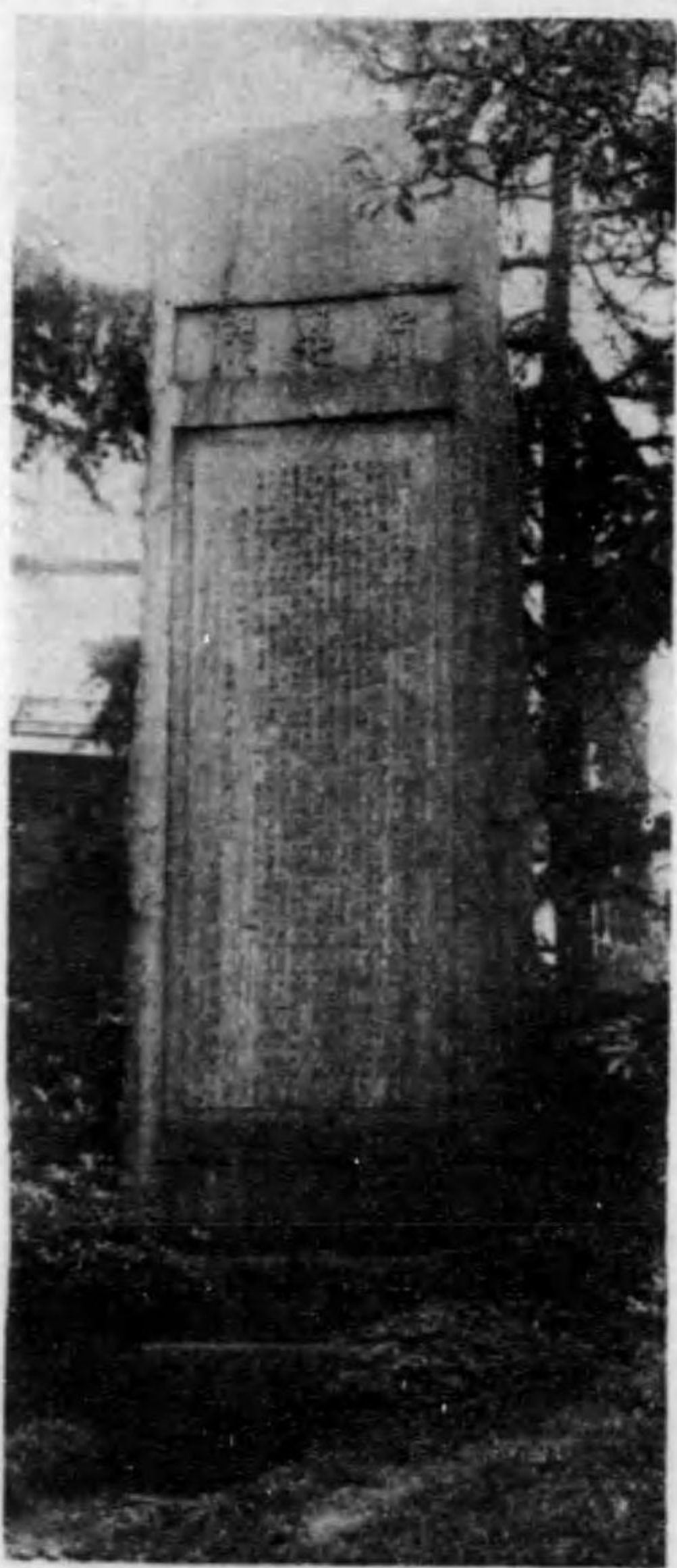


紀 恩 碑

日本ペイント製造株式會社ハ明治十四年ノ創業ニ係ル光明合資會社ヲ繼承シ同三十年ニ設立シタル塗料及ヒ顔料製造會社ニシテ我國化學工業ノ鼻祖タリ日清日露兩戰役ニ方リテハ軍需工業トシテ國家ニ貢獻スル所鮮カラス爾來業績日ニ進ミ大正ノ初年ニ及ヒ全ク此種製品ノ輸入ヲ防遏スルニ至レリ歐洲戰亂ニ際シテハ支那印度南洋等ニ大量ノ輸出ヲ爲シ販路年ヲ逐ヒテ開ケ今ヤ海外到ル處本品ヲ見サル無キノ盛

かに三工場に過ぎなかつた。
君はこの有難き 聖恩を永久に記念するため、昭和三年二月大阪營業所前庭に高さ一丈一尺の紀念碑を建立した。碑名は京都帝國大學名譽教授内藤湖南博士が撰し碑文は君が執筆して同博士の削正を経たものである。

況ヲ示セリ創立當初ハ資本金四十萬圓ニシテ本社ヲ東京南品川ニ置キ爾後業務ノ進展スルト與ニ増資シ明治三十八年更ニ工場ヲ大阪ニ設ケ銳意擴張ヲ圖リ遂ニ資本金五百萬圓積立金百五十餘萬圓東西兩工場二萬餘坪ヲ有スル現在ニ至リ實ニ我國塗料需要ノ過半ヲ生産ス大正九年事業ヲ整理シ庶務ヲ改革シテヨリ工場ノ設備頓ニ面目ヲ新ニシ生産ノ能率大ニ増進ス共存共榮ハ



我社經營ノ大方針ニシテ各種ノ施設皆之ヨリ出テ從業員ノ國民的教養ニ至リテハ最モ留意努力スル所ニシテ今日内容外觀共ニ舊態ヲ改メタルモノ實ニ茲ニ由來セスンハ非ス大正十四年事雲上ニ聞エ五月十九日 皇太子殿下鶴駕ヲ大阪ニ駐メサセ給フヤ侍從牧野貞亮ヲ遣ハシテ工場ヲ視察セシメ給フ臣等感激恐懼措ク所ヲ知ラス議

リテ碑ヲ建テ光榮ヲ萬代ニ傳ヘントス凡ソ事ヲ成ス創業ト守成ト其ノ難易違カニ斷スヘカラスト雖モ至難トスル所ハ守成シテ更ニ之ヲ擴張スルニアリ冀クハ現在及ヒ將來ニ於テ事ニ我社ニ從フ者寸時モ此ノ感激ヲ忘ルコト無ク同心戮力社業ノ進展ト國富ノ興隆ニ勉メ以テ 皇恩ニ報イ奉ランコトヲ

大正十五年五月十九日

日本ベイント製造株式会社

取締役社長 小畑源之助謹識

また同年六月二十九日には、君は 伏見宮博恭王殿下より、華族會館に於て賜餐の恩榮を忝うした。これは君が日本ベイント社長として塗料・顔料の輸入を防遏せし功勞を表彰されたものであつた。

この年九月十八日大阪中央放送局の依頼により君は當時三越七階の放送所から塗料工業に就いて初の放送を行つた。

創立三十年記念會

昭和三年は日本ベイントが株式會社組織以來滿三十年に相當し、定款に定められた營業期間の滿了を見たので、會社に於ては過去を回想記念すると共に將來の新生命に入る首途を祝すべく、東京・大阪兩都に於て朝野の官民八百餘名を招待して盛大なる記念祝賀會を催した。

今更改めて説くまでもなく、日本ベイントの社運には時に隆替があつた。特に大正九年は既述の如く會社にとつて大いなる危機であつた。この時一步を過つたならば會社はその存在を失つたであらう。幸ひに君の献身的努力に依つて頽瀾を既倒に回すを



初めのためのオチラオ放送



得、幾何もなく更生の春を見ることとなつた。而して今や目出度くも創立三十周年を迎へ、洋々たる前途を壽ぎ記念祝賀の盛筵を開くに至つたのである。君は過ぎ來し苦難時代を顧みて、まことに感慨無量のものがあつたであらう。

會社に於ては委員を設けて協議の結果、東京記念會は三月二十日、大阪記念會は同月二十六日開催することに決定、諸般の準備を整へ豫定の如くこれを實行した。今當時の社報に依つて記念會の模様を左に轉載する。

東京記念會

東京は三月二十日午後五時より東京會館に於て記念會を開いた。會するもの大官に

は中橋商相・望月遞相を始め商工・鐵道・海軍・逓信各省の次官・局長、平塚東京府知事・宮田警視總監・緒方陸軍・坂本海軍兩中將等、學者側は古市・眞野・坂本、高松等斯界の耆宿を初め小寺國立工業試驗所長・加茂正雄博士・池口慶三博士等一流の大家顔を描へ、實業家としては藤田商工會議所會頭・星野錫・藤山雷太・牧田環・田中榮八郎・國澤新兵衛等の諸星、加ふるに華胄華族柳澤伯・仙石子・牧野子・川村伯・板倉子・阪谷男等の一團が特に異彩を放つた。デザートコースに入り小畑社長は會社の歴史と其經營方針につき演説し、中橋商相・高松博士・星野錫の三氏、各々其立場によりて鄭重なる祝詞を述べ、それより「會社の現状」一巻を映寫して興を加へ、中橋商相の發聲で會社の萬歳を三唱して散會した。會者總員五百名、近時稀なる盛會であつた。當日小畑社長の挨拶並に來賓の祝辭は左の通りである。

小畑社長挨拶

日本ペイント會社は明治七年に端を發し同十四年に創業せられました光明合資會社の事業を繼承するの目的により、明治三十年十月に設立せられ、三十一年四月に

開業致したものでありまして、本年を以て其前身光明社創始より四十七年、株式組織後滿三十年を算へるのであります。

就きましては此長き年月の間、國家及大方に蒙りました御指導御授護に對し厚く御禮を申上げたいと存じまして、今夕此處に粗筵を設け、閣下各位の御尊來を御願申上げました處、公私御多端の折柄御差繰御光臨を辱く致しました事は此上なき光榮でありまして、永く當會社の記録に留むべき事であると存じます。

當會社の經歷に就きましては前刻御手許に差出しました小冊子に認め置きましたから後に御高覽を願ひ度いと存じますが、一言之を掻い摘んで申上げますと

明治の初年に我國の化學工業に着眼した青年先覺者がありまして、苦心慘愴、亞鉛華及ペイントの創製に努力し遂に夫れが完成致し、光明社となり光明合資会社となり日本ペイント製造株式会社となり、順調なる経過を取りまして、明治時代には軍需工業として貢献し、爾來輸入を防遏し輸出を實現する迄に進んで参り、兎も角も獨立したる一工業となつたのでありまして、烏滸がましき申分かは存じませぬが、當會社の歴史は其まゝ我國の塗料工業史であり、又本邦化學工業發達史の一部であります。而かも明治初年の先覺者たりし一青年は、今日茂木重次郎翁として此處に

出席して居られるのであります。

又當會社が、小さい乍らも前後五十年、買収もされず併呑もされず、富豪の背景も持たず國家の補助も受けず、獨立獨行最初の目的を一貫して今日に及んだ事は、聊か興味のあることと存じます。

近時世相の變化に鑑みまして、當會社は其經營の基本を共存共榮に置き、單に株主の爲に利益を擧げると云ふ事のみに満足せず、經營夫れ自體が國家奉仕となり社會奉仕となると云ふ事を標目とし、事業は會社の事業であると同時に國家の事業であり、又従業員は會社の用員であると同時に帝國の臣民



(君るす抄換)會賀祝京東年十三立創

である、云ふ見地より致し、其經營を開放し、従業員の國民的教養に就いては特に意を用ひて居るのでありまして、歐洲戰亂後我國の化學工業が萎微凋落を極めて居りまする中に當會社が相當の成績を挙げ堅實に進んで参りました事は、偏に閣下各位の御指導に依る賜でありますが、又一面經營の合理化、上下一致の努力に依る處のものであると存するのであります。

既往三十年間に取り固めました若干の力と其信用とを持ちまして、今後大に國外に發展を計り、君國の惠澤に酬いなければならぬと信じて居る次第であります。

今回創立三十年記念行事と致しまして、全國的に塗料に關する科學知識の普及宣傳を企て、鐵材木材の乏しき我國の前途に聊か貢獻しようとう意致して居りまするのも、當會社經營方針の一端に外ならぬのであります。何卒此上共御指導と御援護を御願申上げます。

今夕は何等の取り備へも御座いませず、貴賓を待つ禮を缺いで居りますが、何卒御寛恕の程を願ひ上げます。尙席順の如き手狭まな處で亂雜を極めて居ります、此點幾重にも御許を願ひます。

終に臨みまして、杯を舉げて閣下各位の御健康を祝します。

中橋商工大臣祝詞

私は席を此處に御設けになつた爲に第一番に立つて祝詞を申上げます。

日本ペイント會社は只今小畑社長より御話のあつた通り、沿革の古い會社で又誠に發達した會社であります。私は大阪で暫く船會社に關係して居りました爲に日本ペイントの事はよく知つて居りますが、未だ其工場を見る機會がありませんでした、先刻活動寫眞で全般を知り得た事を喜ぶ次第であります。

私は各地の工場を見て歩いて居りますが、小畑社長が先日御見えになつたので私も此際是非工場を見せて貰ふ積りで居りましたが、折悪しく風邪の爲に其機會を失ひました。

私は今日自動車の中で會社の沿革史や考課狀



中橋商工大臣と對談

並に小畑君の演説を拜見しましたが、全く会社の歴史は茂木君と小畑君の立志傳が書いてあるかの様に思はれ、又我邦ペイント工業の發達したる歴史とも見えるのであります。

私は何れの会社に招待を受けても一番愉快に感ずるのは、其会社の社長なり事務なりが自分の会社について自慢を話されると云ふ事で、其の自慢の程度によつて其の会社の成功を知る事が出来るのであります。日本ペイント会社も其の一つであると思ひます。

日本ペイント会社の模様を見て感ずるのは、過去三十ヶ年に互り一割或はそれ以上の配當を繼續して居る事でありませう——一回は無配當があつた様でしたが——それから会社の積立金の多い事で株金の三割にも當つて居ります、是によつて会社の發達と經營の確實なるを知る事が出来ます。又一つは此会社が研究室を持つて居る事でありませう。其結果特許を十九も取つて居る、何れの会社でも研究室を持つて居る所は必ず發達する、特許の多い所は必ず榮えて行く、今後日本ペイントでも三十・五十と特許をとられる事と思ふ。今一つ敬服する事は、近年此会社の能率が非常に増進して居る事でありませう。能率がドンドン増進して生産費が安くなれば、是程喜ば

しい事はない、小畑君の話には餘り能率が増進すると社會政策上却つて宜しくないと思はれるが、矢張り安いものを造られた方が私はよいと思ふ。

会社製品の販路は先程の活動寫眞にもあつた様に、今や内地は勿論朝鮮・滿洲・支那・南洋・印度までも征服して居る。私は此目出度き三十年の記念會に招かれた事を誠に嬉しく思ひます。

終に臨み、私は此席より小畑社長を初め今夕御來會の四百有餘名の諸君の御健康を祝します。(乾杯)

高松工學博士祝詞

本日の御祝宴に私も御招待を受けまして御鄭重なる御饗應に預りましたのを深く感謝致します。當会社が株式組織以來三十年を經過した今日に於て、東洋の一大塗料会社と云はるゝ程に發達しましたのは本邦化學工業界の爲め大いに慶賀すべきこととありますが、翻つて其基源を尋ねますと、實は茲に御列席の茂木重次郎君が青年時代に受けた多少の科學知識を利用して塗料の主成分たる亞鉛華やベンキ油の製造法を研究されたのが抑々發端で、度々事業の上に失敗を重ねたにも拘らず、能く

忍耐努力して事業の成功を謀り、それが好結果を奏し幸ひ製品の販路を得ることが出来たので光明社と云ふ共同團體を作り芝區三田四國町に小工場を置き事業を經營することになつた。私も今より四十年程前其工場を見に行きましたが、是れが東洋に於けるペンキ工場の元祖であり、即ち現今の日本ペイント會社の前身であります。光明社の經營も却々困難であつたさうだが、或る有力者の援助に依り資本を増加して合資組織となし、尋いで明治三十年に至つて株式會社に變更し、田坂初太郎君が第一次の社長となり茂木君が取締役兼技師長となり、續いて現今の重役諸君の時代に移つて益々事業の進歩發達を謀られたのであるから、茂木重次郎君は實に本邦塗料界の元祖であり又恩人であります。今日會社のペンキ製造法は昔の方法に比して雲泥の相違があります、例へば昔六十日を費して出来た光明丹が今では一晝夜で出来る上に色合が優秀であり、亞鉛華も純白に出来るからペンキ以外の製品にも廣く應用されて居ります。

歐洲戰爭以來一般工業の進歩に伴ひ新顔料が製造され、また人造樹脂・人造ゴム・人造絹糸の如き新しい物が現はれて、自然特種ペンキの需要が起り、將來益々學術的研究の必要がありますから、當會社に於かれても常に此點に盡力されんことを望みます。

みます。

特種ペンキの中で防火ペンキの製造は本邦に於て特に必要であると思ひます。今より四十年程前フアイヤブルーペイントなるもの見本を英國から日本へ持歸つた人がありまして、私が之を分析した處石棉粘土其他二三の藥劑を含んで居りました、依つて之を板に塗つて焼いて見たが燃えませんでした。其頃東京に居た外國人中にも防火塗料に就いて研究した人もありましたから、私は是等の事實を取纏めて東京大學の講義室で防火法及消火法に就いて講演致したことがあります、其頃は此等のことに關して別段注意する人もありませんでした。然るに時勢が變遷して今日では市街家屋の表面には防火塗料を施す必要が起つて來ました。若し完全な防火塗料が出来て一般家屋に之を應用せば、火災や放火を防ぐと同時に多額の木材及家財を節約する利益があらうと思ひます。曾て林學博士志賀泰山君の發明に係る防火特許法を帝國發明協會に於て發表されて以來、有志者が匿名組合志賀工業所を設立し、昨年之を株式組織に改めて各種の防火・防腐・防水等の事業を經營し、傍ら是等の問題に就き研究して居りますが、防火塗料の如きは今後の研究に残されて居ります。之等の事は有力なる日本ペイント會社に於て是非御考を願ひたいと存じます。

本日は御招待の御禮を申上げる序に聊か卑見を述べて御参考に供した次第であります。

星野錫氏祝詞

私は實業者の一人として此席に列しその立場から御喜びを申し上げます。今日は三十年・五十年の意義ある御祝宴に私共が御招きを受けた事を衷心より光榮に存じます。小畑社長の御話で会社の詳細はつくされて居りますが、最初の光明社時代、次いで日本ベイント会社となつて前後五十年の歴史は誠に貴いものでありまして、特に茂木氏の技術、小畑氏の經營、其異常の奮闘に對しては祝の辭よりも寧ろ感謝の辭を以てせねばならぬ事と思ひます。

又私が特に感じた事は、歴代の社長其他重役諸君の終始一貫した堅實なる主義方針によるにあらざれば今日の成功を見る事は出来なまいと思ふのであります。

尙我々の立場から見ると愉快に堪えないのは、輸入の防遏を完全に達成せられたこととであります。實際輸入防遏の完成を遂げた事業は我國では稀であるのに、日本ベイントが之を果して進んで東洋南洋一帯に輸出されるといふ事は如何にも嬉しい事

であります。

尙又今回の記念事業として、塗料に關する科學知識を我が同胞の頭に注入する事に努力されるといふ事は綽々餘裕ありで重々お目出度い事であります。やがて会社の繁榮が之によつて培はれる事と信じます。

私は茲に祝詞を述べ、今後も今日迄の方針を繼續せられまして益々國家に貢獻せられん事を切望致します。

此の機會に於て、商工大臣閣下御發聲の下に日本ベイント会社の萬歳を唱へたいと存じます、皆様の御同意を願ひます。(拍手)

大阪記念會

大阪は三月二十六日午後五時より中之島大阪中央公會堂で記念會を開いた。會するもの田邊大阪府知事・長兵庫縣知事・菱刈第四師團長・關市長・稻畑商工會議所會頭・白川市會議長・楠本醫科大學長・遞信・營林・造幣・稅務・專賣・鐵道各局長・稅關長等の外、京都帝大より荒木總長を始め二見・田邊の兩名譽教授、青柳・大井・松村・中澤其他の教授十數名の顔揃ひにて、其他莊司工業試驗所長・堤高工



(君るす摺揆)會賀祝阪大年十三立創

校長・高岡工業研究所長等、殆んど關西學界の權威者を網羅し、又實業家としては菊地・森・田村の上院議員、岸本兼太郎・岩井勝次郎・村田・太田の商船事務、岡田・種田・上田等電鐵界の有力者、上島大株理事長・三井物産瀨古重役・住友の八代・三四の一瀬・第一の野口氏等を始め、安宅・片岡・本莊・長谷川・大林・村木・伊藤・野田・中山氏等の諸星合せて四百名、開會第一に中橋商工大臣の祝詞を讀上げ、映畫「会社の現状」一巻を披露して開宴、デザートコースに入り小畑社長より会社の歴史に就き一場の演説あり。田邊大阪府知事來賓を代表して之に答へ、荒木京大總長は學界より見たる

感想に就いて述べ、關市長の發聲にて会社の萬歳を三唱し、終りて河合ダンスの餘興に移り盛況裡に閉會した。尙當日來賓の祝辭は左の通りである。

田邊大阪府知事祝詞

今夕の御禮を私から申上げたいと存じます。當市並に京都及神戸より多數の先輩が御見えになつて居りますのに、私がこゝに立ちますことは甚だ僭越で御座いますがお許しを願ひたいのであります。

日本ベイント會社の事歴は只今社長からお話がありましたが、それより先き活動寫眞でも詳かにお示しになりました。明治十四年に光明社が出来、明治三十年に株式會社となり、つひに資本金五百萬圓の大會社となり、其積立金も百五十萬圓に上り、社運の隆昌なる事は誠に慶賀に堪えません、これは社長と従業員が力を協せて事に當られた結果でありまして、獨り御社のためのみならず、國家のため衷心からお祝ひ申上げる次第であります。

社長の御説明にありましたが、明治七八年頃に茂木重次郎君と云ふ一青年があらまして、その人が塗料と云ふことに着眼され、苦心慘愴の結果、亞鉛華其他の顔料

を造り、續いて各種のペイントを創製し、事業が漸く緒に就いた頃日清戦争が起り、三十七八年の戦争、次いで世界大戦を経て我日本が隆昌に赴くと共に御社も盛んになり、曩にお示しになつた如く、今では其製品が支那・南洋・印度にまで行き、全世界に分布せんとするの概があるであります。而も只今御話のやうに日本ペイント会社が今日まで、即ち株式会社になりましてから三十年、當初からは五十年の歴史の間、別段官憲の補助も受けず又金権の背景も持たず、獨立獨行して來たと云ふことは社長は聊か興味のある事だと言はれましたが、興味どころでなく大いに誇るに足るの事柄だと存するのであります。

又今回は塗料に關する科學知識の普及企畫を立てられ、此の方面の蒙を啓ぐために努力せられると云ふことであります。誠に國家のためにも結構な事であると存じます。御社が今日の如く榮えた所以も蓋しこれ等奉仕の御心掛に因するものでありと存じまして、誠に敬服する次第であります。只今三輪少將閣下がお作りになりました詩を代讀致しまして私の祝辭に加へたいと思ひます。

培風三十霜

鵬翼及南洋

振氣開生面

更期爲遠翔

私は茲に御社のモットーとせらるゝ共存共榮の下に、従業員も資本家も亦其の販賣者も需用家も俱に共に御隆昌に赴かれん事を祈る次第であります。

荒木京都帝國大學總長祝詞

小畑社長並に会社の諸君、私は今夕御招待を蒙り、此の慶びに逢ふの光榮を得ました事を、深く感謝致します。

只今小畑社長のお話を拜聴致しまして、當社今日の隆昌を致した事が偶然に非ざるを知り得ました。其の始めに當つては、茂木君の如き技術家が多年熱心の結果ペイントの製造に成功したると共に、歴代の社長並に社の幹部諸君が經營宜しきを得たと相俟つて、社の事業が漸次順調に向かつたのであります。

現社長小畑君が任に就かれて以來、銳意事に當り、諸弊を除き去り、第一に重きを技術に置き、研究機關を整頓し、又工場及び機械を改善し、製品の質を益々純良になし、其の産額の著しき増加を來したのであります。第二には力を社員の和衷協同と能率増進に盡し、従業員販賣店等に至る迄盡く株主となし夫々應分の利得を受くる様になり、又教養機關を設け社員の人格修養に供し、社員をして各々安んじて

業を執る事を得せしめ、其の結果社員各自は其の位置を益々向上し、其の資産を益々増殖し、社會奉仕の實を擧ぐるに至つた。位置は向上し資産は増殖致しましたと

すれば不平の起る譯も無く邪念の萌す筈もありません。



君自筆の記念扇

そこで各自は眞の心の平和を得るのであります。此の各自の心の平和が相合して會社全體の平和となり、個人力が相集つて會社全體の力となるのであります。其の偉大なる會社全體の力を以て事業の成功に精進致しますのでありますから、會社の信用は益々厚く、製品の販路は益々擴大し、今日に於ては此會社の製品を以て獨り國內の需要を充し得るのみならず、又海外に向かつて輸出するに至つたのであります。社としての發展は實に驚嘆に堪えません。

小畑社長の此の成功は實に會社の幸福なるのみならず、又本邦工業界の幸福であります。私、此の意味に於て社長並に會社諸員の御健康を祝し、併せて社運の日を逐うて隆昌に赴かれんことを祈ります。

君はこの創立三十年記念會を祝福するため、自作の詩四篇を揮毫し紺紙金泥刷の扇子として各方面に配贈した。

感述

但山小畑源

辛	苦	經	營	三	十	年	晨	昏	唯	恐	辱	吾	先
如	今	遂	得	當	初	望	努	力	更	應	期	萬	全
辛	苦	經	營	三	十	年	勵	精	務	作	外	人	先
如	今	歲	歲	增	輸	出	努	力	更	應	期	萬	全
辛	苦	經	營	三	十	年	衆	僚	勤	勉	互	爭	先
如	今	進	立	擴	張	計	努	力	更	應	期	萬	全
辛	苦	經	營	三	十	年	底	床	常	在	衆	慶	先
如	今	感	謝	從	前	德	努	力	更	應	期	萬	全

尙當時創立三十年を祝して各方面より君に寄せた詩文の中主なるものを

左に掲げる。

賀日本比伊務都會社改制

八十六翁 櫻井

勉

錦鶏間祇候

創業干今三十年

利源晨夕湧如泉

偏祈全社無荒怠

益務誠勤益務堅

昭和戊辰春祝創業三十年佳辰

石齋 田邊 朔郎

京大名譽教授工博

辛苦經營三十年

祝君業務占優先

如今尚悅聞勤厲

努力更應期萬全

日本伯印土會社社長小畑但山雅契與予同郷君自入社以來
銳意一掃宿弊革新業務激勵社員精選製品擴張販路以茲社
運日日隆盛至本年記創立三十周年即贈一伽陀以慶賀之云

沙門 尾關 行應

東福寺派管長

艱難途路幾窮通

日本伯印社運隆

三十迎年親祝禱

人和精勵奏全功

賀日本遍塗株式會社創立三十
年次小畑但山社長原韻

確堂 三輪 時雄

造兵廠工廠長少將

努力閱來三十年

經營有序制機先

欽君張翼圖南計

富國偉功應得全

會社關係者追悼會

次いでこの年の初夏には、創立以來三十年の間に於て幾多の功績を會社に残した先亡役員・従業員・販賣店・仕入先・その他一般縁故者の靈を祭りその遺徳を追彰するため、東京は六月十七日芝高輪東禪寺に於て、大阪は同二十四日京都東福寺に於て大追悼會を執行したが、君は社長としてその席に臨み左の祭文を朗讀した。

祭文

日本ペイント株式会社取締役社長小畑源之助清酌庶羞の奠を布き、當會社先亡役員従業員取引先其他縁故諸君の精靈に白す。惟ふに當會社創立以來三十年、資本を増加すること三回、規模を擴張すること十數回、時に消長なきにあらざりしと雖、社業漸くに榮え、國家の産業として、夙に輸入を防遏し更に之を輸出に轉じ、社礎の確立と共に經營を共存共榮に取り、大正十四年には、皇太子殿下侍從御差遣の光

榮を拜し、今回創立三十年記念會を開くや、國務大臣を始め朝野の精神學界の耆宿悉く之に參會され、今や當會社の盛名は内外に聞へ、眞に東洋塗料業界の第一人者たるに至れり。是偏に聖代の餘澤と、先亡諸君の苦心經營又援護助勢による處のものたらずんばあらず。而も幽明境を異にし、俱に今日の喜びを語る能はず、悼惜の情焉ぞ耐えむ。役員従業員相議り茲に創立三十年記念追悼法會を營み、虔みて諸君在天の靈を祭り追慕感謝の微衷を捧げんとす。尙くは彷彿として來り饗けよ。

塗料知識の普及宣傳

創立三十年記念行事の他の一は塗料知識の普及宣傳であつた。會社に於ては君の統率の下に、全國に涉つて講演會映畫會の開催を行ひ、塗料知識を一般國民に眼と耳から注入せんとするの計畫を樹て、昭和三年三月中旬全領土の特約店を東西の本支店に召集して打合せを爲し、右開催の豫定地二百餘箇所を選び、爾來一ケ年に互り内地一體は勿論、朝鮮・臺灣・滿洲にも及んで前後百餘回の講演會映畫會を催した。映畫については最初に横

濱シネマ會社をして「塗料の話」全四巻を撮影せしめ學術映畫として全國の學校・學會等に提供し、更に通俗的大衆的に塗料知識の普及を圖るため、大阪の劇作家隱岐冷濤氏に脚色と監督を囑し、澤田プロダクションをして衆化に役立つたことは非常なものであり、嘗に一會社の事業としてでなく廣き意味に於て一種の文化運動でもあつた。

君は更に國民の常識として塗料知識の普及徹底を期する爲、此年十二月塗料知識普及會を設立し、工博高松豊吉・理博龜高德平・工博片岡安・理博高岡齋諸氏に顧問を囑託し、自ら會長となつて會社の記念行事を繼承擴



(作郎壽國大) 額掛しせ早贈に君りよ員社全

立志劇「街路に立ちて」全六巻を完成せしめ、これを全國各地に於て上映した。抑も映畫を事業宣傳に用ゐたのは日本では之が最初で、此の企てが塗料知識の民

大し、この啓發運動を續けた。

大黒會と惠比須會

大黒會と惠比須會は日本ペイントの特約販賣店主の團體で、何れも會社經營の中軸たる君に私淑し、その人格を仰慕して組織されたものである。

大黒會が創立されたのは大正八年で、君が大阪支店長時代のことであつた。この會名は日本ペイントの商標が槌印であるところから起つたもので、會員は大阪を中心として名古屋・中國・九州・朝鮮・滿洲に及んで居り、井上清次郎(福岡)・早瀬榮之助(大阪)・原田猪八郎(大連)・西田彌兵衛(神戸)・和田壽夫(京城)・横山治郎吉(神戸)・辰巳直三郎(京都)・玉木勘七(大阪)・上村長兵衛(大阪)・福永淳三(名古屋)・京野敬二(下關)・岸上新助(大阪)・貴志克禮(大阪)の諸氏であつた。

次いで大正十一年十月に關東方面の特約販賣店主が大黒會に呼應して惠比須會を組織した。其の會員は渡邊楷助(函館)・大村五左衛門・高橋九



山本聯合監隊司令長官來社

六・仲萬次郎・上野兵松・黒田市之助・小西喜兵衛・下田嘉右衛門・鈴木富次郎（以上東京）・久保田清吉（横須賀）氏等であつた。

前章に於ても述べた如く、從來の日本ペイントでは會社と特約販賣店とを別箇のものとし、これを相手方として取扱つたのであるが、君はこの考へ方を一變して特約店を會社の延長と見做し、株主・重役・従業員・特約店を一體として共存共榮の實を擧げるといふ方針を取つたので、此ことが以上の人々によく諒解され、進んで株主となつて

會社と運命を共にせんとするまでに及んだ。そして之等の人々は何れも君の人格と手腕を絶対に信頼し、中には「會社の株を買ふのではない、専務（當時の代表者は専務取締役）を買ふのだ」と云つて大株主となつた人もあつた。

君も亦此の大黒・惠比須兩會に關しては十分に意を用ゐ、會社の經營内狀に就いても開放して之を議り、毎年各地に懇談會を開いてその融和親睦に資し、

後には兩會を一丸として東西聯合會をつくり、益々その結束を堅くした。



中橋工商大臣來社

此事はいつとなく世上に傳はり、新しき經營法として識者の注意を惹き、之に學ばんとするものゝ續出を見た。

壽像の建立

既述の創立三十年祝賀會と相前後して、惠比須會及大黒會の人々は君の會社に對する功績を永久に記念せんため、その壽像を製作して東京・大阪兩工場に建立することを決議し、彫金の大家大國壽郎氏に依囑して之が製作中であつたが、昭和三年九月見事に出來上つたので、十月其除幕式を舉行した。壽像の記文は藤澤黄坡氏の撰に成り、左の如くである。

此爲小畑源之助君壽像也一在于此一建于東京工場也建之者惠比須大黒兩會員也蓋君爲長于日本伯印土會社使社運年隆使我邦塗料之業大昌而遂使其弘顯于寰宇人皆以君爲中興之宰也會員等既爲其東洋特約販賣店實樂其業之隆昌而今茲方當會社創業三十周年思所以紀君功德者於是乎有此事焉余爲記其由云

浪華 藤 澤 章 撰

尙壽像建立に際し同會の代表者は會社に對し左の贈呈辭を寄せた。

日本ペイント株式會社創立三十年に當り、全國特約販賣店の團體たる惠比須會及び大黒會は、現取締役社長小畑源之助君の壽像を大國壽郎氏に囑して製作し、之を贈呈して東京・大阪兩工場の前庭に建て、以て祝賀の微意を表せんとす。小畑社長は大正元年營業部長として入社せられてより、大阪支店長・専務取締役・取締役社長に歴任せられ、此間年を閲する十有七、會社現在の盛運を導きたる所以は一に繋つて君の聰明と熱誠とにあり。君の心血は盡く本社の經營に注がれ、其聰明は能く時勢の進展を察して技術と企劃を改良し、其熱誠は能く難

更生後の會社と君



小畑社長壽像除幕式

關を排して販路を内外に開拓し、以て東洋第一の名實を備ふる今日に至らしめたり。若し夫れ歐洲大戰後我國事業界の恐慌時代に方りて社運の危殆に瀕するや、丹心を人の腹中に置き、身を以て管轄臥薪の範を示し、遂に頽瀾を既倒に回したるの一事に至つては、實に君に非らずんば能はざりし所なり。君又共存共榮を社是として販賣店を悉く株主たらしめ、其利害を念とすること会社の盛衰を見るが如く、亦従業員の國民的教養を重んじ、君と従業員との關係は實に經濟の上に止らず師弟の義を生ずるに至れり。宜



なる哉、事 雲上に聞え、大正十四年の恩榮を蒙るに至りし事や。我等は株主として又販賣店として君を仰いで日本ベイント株式會社中興の祖と爲し其徳を讃歎

せずして已む能はざるなり。乃ち君の功績を永久に傳へんが爲敢て此舉に出づ。冀くば微意を納められん事を。

昭和三年九月

惠比須會代表者 黒田市之助

大黒會代表者 横山治郎吉

日本ベイント株式會社

代表者取締役社長 小畑源之助殿

伏見宮殿下東京工場台臨

昭和三年十月四日には 伏見宮博恭王殿下が御附武宮御堀大佐を隨へさせられ日本ベイント品川工場に成らせられた。君は社長として伊東技師長その他を率る各工場を御案内申し上げた。當日の光榮に關し君の謹話（雜誌工業界所載）は左の如くである。

産業御獎勵の御思召により本社の品川工場へ 殿下御台臨の趣は九月中頃に拜聞し

更生後の会社と君